

な鈴を鳴すと同時に鎗で楯の上を打ち敲いた。

俄の物音に驚いて無数の鳥群が舞ひ上つた状は宛然黒雲の天を蔽ふがやうであつた。鳥群がハークリーズの頭の上を飛んだと思ふとその鋭い羽根が楯の上に落ちてカチカチと鳴つたり四邊の樹木の葉を寸寸に引き裂いたりした。

ハークリーズは續けざまに鈴を打ち鳴したり楯を敲いたりしたので鳥は森を遁け出して了つて後に残つて高い樹の頂から見張つてゐたのは唯六羽であつた。この残つたのは毒矢で容易く射とめた。

爾後鳥群はコアーズ島に巢を構へて又と戻つてスチムフェーラス谷を惱ますことはなかつた。

その八。第六回の勞役。

エージアス王の畜舎を掃除すること。

(希臘神話)

ハークリーズの次の勞役はエージアス王の畜舎の掃除であつた。ユーリスシアス王は彼に命じてこの仕事は一人で一日の中にせよと言つた。

エージアス王は日の神ヒーリオスの息であつてジェーソンと共に金羊毛の探索に海に航した勇士の一人であつた。彼はイーリス國の王であつた。王の飼養せる獸群は奈何にも多数であつて夕方家畜が牧場から畜舎に戻つて來る折に果てしもなく野原を亘つて溢ぎ出る状は宛然白雲の西風に追はれて空を走るがやうであつた。

この家出のうちには日の神ヒーリオスに奉納された十二頭の雪白の牡牛がゐたが内一頭は先導で一際目立つて白いので他の家畜の中から星のやうに光つてゐたのでその白牛はヒーリオスの息の名に因みてフェーイーソンと呼ばれた。豹や狼や獅子などが山から下りて來て家畜を襲ふことが度々あつたがその折にはいつも十二頭の白牛が先つ行つてその捲き縮んだ毛のある額を下げたり鋭い角を顔つたり吼えたりしながら野原を徘徊する獸を威嚇すやうな状をして行つて皆追ひ戻して了つた。

(希臘神話)

パークリーズがエーシアス王の家畜の間に行く折にはいつものやうに獅子の皮を身に纏つていつた。風が皮の臭を白牛フェーイーソンの方へ吹き送つたのでフェーイーソンはその臭でわが讐敵が来るものと知つてこの讐敵から家畜を防ぐのは吾が義務だと思つてパークリーズを襲はんと突進して来た。がパークリーズは非常に強いで毫も牡牛を怖れずに平気でその白い角を掴み頭を打ち伏せて地に壓しつけた。これよりは何時パークリーズが遣つて来てもフェーイーソンは場所を譲つて敬意を拂つたので他の家畜も皆これに見做つた。

エーシアスの畜舎は河の岸に沿ふてズラリと長く並んでゐた。この畜舎は一日に掃除せなければならぬので別に溝を掘つて河の水を畜舎に注ぎ入れたので畜舎は無数にあつたが流水の力で忽ち奇麗に掃除が出来た。

その九。第七回。の勢役。

(希臘神話)

クリート王の牡牛を生捨ること。

(希臘神話)

マイノスがクリート王に立てられた折に王はわが世を治むる初に先づ犠牲をジュピター神に捧げやうと思つたので濱邊に下りて石の祭壇を造つて置いて海神ネプチューンに呼ばはつて犠牲にする動物を遣はし給へと乞ふた。未だこの願を述べたらぬうちに銀色の角のある雪白の牡牛が海から浮かみ上つた。恐らくこれに勝つた美しい動物はあるまいこれに勝つて完全な犠牲はあるまいと思つた。がマイノス王は斯んな立派な動物を生かして置けぬのを黙然に思つた。そして柔和で申し分のない生物なので祭壇に上せて犠牲にせず自分の牧場に放して遣つた。ネプチューンが牡牛を遣したのはジュピター神に犠牲にする爲めであつて外に用を充るためではないから不敬であつた。故に神々がこの美しい生物の柔和な性質を奪つて荒々しい危険なものとし給ふたのでこの牛がクリートの森をさまよつて

るのは住民一同の恐怖の種であつた。

遂にユーリスシアス王はハークリーズを遣つて此の牡牛を生擒らせた。

ハークリーズは根棒ばかり携へて牡牛の度々見えたる森の中に行つて泉の傍で待ち受けてゐるうちに嘔れた叫び聲が聞えて森の間に白い物がちらと見えたと思ふうちに牡牛が襲ひかかつて来て烈しく白い角を振り立てた。

ハークリーズは根棒を地に投げ捨て角を引つ纏んで牛を無手と擒へて奈何に悶蹙しても手離さなかつた。

牡牛は逆も叶はぬと看たら忽ち以前の柔和な性質に立ち返つて手馴れた小羊のやうにハークリーズの後に付き従つた。その後マイシーネ市にこの牡牛を連れて行くのに海を游がせ自からその背に乗つて行つた。

その十。 第八回の勞役。

(希臘神話)

ダイオミデス王の馬を生擒ること。

(希臘神話)

スレース國王ダイオミデスは猛き軍好きの王であつて、軍神マアーズの息といはれてゐた。王は客を遇するの道を知らなかつた。王の領國の海岸で破船の難に遭ふものがあれば二度とその消息の分ることはなかつた。

王は軍馬一對を有つてゐたが好馬であつたので鎖で繋いで置かねばならなかつた。ダイオミデスの馬が斯んなに危険であつた理由は人肉を食はせたからである。又王の領國の海岸で難船したものも皆行方が分からなくなるのもこれにて判断がつくと耳語くものもあつた。

ユーリスシアス王はハークリーズを遣つてダイオミデスの馬をマイシーネ市に連れて來させやうとした。して例により仕事を一際困難になさんため生擒りにせよと言つた。

ヘークリーズはダイオオミデスの領國に行つてみるとこの王について豫て聞いてゐた怖ろしい世評は皆眞實であつたことが直と分明つた。彼は直ちに王の厩に行つて容易く番人を威嚇した上にてこの猛烈な馬を解き放ち鎖をもちて濱邊に連れ出したが皆が後より呼びとめて濱邊まで來ると到頭大勢の追手に追つ附かれた。

やがてダイオオミデス王を相手に闘つた。この王は闘より好きなものがないのでつきりヘークリーズの肉を吾が馬に食はせることにならうと思つた。だがヘークリーズは忽ち王を壓倒して捕虜にした。

それよりヘークリーズは此等の好馬をマイシーネ市に引いて來てユーリスシアス王に献じたので王は必定この贈物を得て満足に思つたであらう、が馬は間もなく厩から逃げでアアケーシアの丘陵に暴れ込んだが終に狼に食はれて了つた。

その十一。第九回の勢役。

(希臘神話)

女王ヒツポリテーの帯を手に入るること。

(希臘神話)

ヘークリーズはダイオオミデスの好馬を生擒つた後間もなく女王ヒツポリテーの帯を取りにアマゾンズ國に遣られた。

アマゾンズは戦と獵とを好む婦人の一族であつてカウカサス山や黒海の邊に住んでゐた。その女王ヒツポリテーは軍神マアーズから贈られた評判の高い帯を持つてゐた。この帯には何か魔力があつてアマゾンズの突撃といへば暴風雨の襲ひ來るがやうに當り難い勢のあるものもこの帯のあるがためだといふ。希臘人が戰に臨んでアマゾンズと對抗したことも一二度あつてその恐るべき敵なることを認めただ下であつた。

ユーリスシアスの王女は尼僧であつたがもしヘークリーズが希臘のために忠義を

しやうとならば女王の帯を手に入れるに勝つた忠義はないと思つた。で王はその爲めにハークリーズを遣つた。

それでハークリーズは黒海を渡つてアマゾンズの國に行き船を女王の宮殿から程遠くない港に繋いだので女王は侍女等を引き連れ何者が來たのかと船中を訪ふた。女王は自身も勇敢であつたが他人の剛勇をも歎美したので音に聞えたハークリーズを親切に迎接へて帯を興へた。がアマゾンズの一人が女王の船中にあるのを見て帯を揚げて他國人が女王ヒッポリターを勾引してゆくと叫んだ。アマゾンズは武器を取て四方八方から船を目がけて走せつけた。これを切り抜けたハークリーズは帯を手にして遁れ出で早や黒海を渡つて歸途に附いた。

ハークリーズはマイシーネに着いて寶玉を鑲め黄金で飾つて重々した評判の帯をユーリスシアス王女に捧げた。斯くて第九回の勞役は終つた。

(希臘神話)

その十二。第十回の勞役。

三頭の巨人シーリオンの家畜を奪つて連れ歸ること。

(希臘神話)

マイシーネ近傍の怪物は此際悉く退治し、且ユーリスシアス王の敵であつた。王と女王は皆征伐して了はねばならなかつた。それでユーリスシアス王はハークリーズを此度はマイシーネから遠方へ遣さねばならぬこととなつた。日の没る國の先にある島に行つて巨人シーリオンの赤い家畜を取つて歸れと王がハークリーズに命じた。

此のシーリオンは非常な巨人であつて三體三頭六脚六腕のある上に一對の翼があつた。彼は夥しき家畜の群を暗い洞穴の中に飼つてゐた。

第十回の勞役を行ふ助にハークリーズは日の神ヒーリオスガ毎夜西から東へ世界

と遇るとき其の中に道入つて遇るのだといへる黄金の大きな盃があるがその盃を借りた。この盃は舟のやうに水に浮び且これを用ゐる人の必要に應じて大きくもなり小さくもなる力があつた。その盃に道入つてハークリーズは遠くこれまで人の行つたことたない西の端へ運ばれて行つた。

大洋の王オーシアナスは吾が領分を侵されたのを怒つて暴風雨を起した。黄金の盃は雲のやうな水烟に捲き込まれて泡粒のやうに漂つた。ハークリーズは少も驚がずオーシアナスに向けて矢を番へた。オーシアナスは心の中に彼が瘦我慢を笑つてやがて波を鎮めた。ハークリーズは島に着いて四方を見渡しオーシアナスの家畜が草を食つてゐる所を認めんがために高い山に登つた。山の上に立つてゐるとオーシアナスの兇悍な両頭の犬に襲はれたのでハークリーズはその犬を根棒で打ち殺してホット一息つかぬ間に此度は犬のやうに兇悍なオーシアナスの牧者がハークリーズの手足を引き裂かんとする勢で襲ひかかつて來たのを又重い根棒の一打ちで殺して了

(希臘神話)

つた。

やがてハークリーズは家畜が牧場で草を食つてゐるのを見てその家畜を追ひ廻し始めた。この時オーシアナスはハークリーズを目がけて六本の手に六本の根棒を同時に振り廻し三ツの巨きな喉を鳴らして唯一撃にと言はんばかりの險相で大踏に歩んで來た。オーシアナスが斯く六本の根棒を振り廻しながら丘陵を下りて來たときの状は宛ら生きた風車のやうであつて大抵の人は怖れて氣絶したであらう。がハークリーズは携へてゐた毒矢のことを思ひ出して一矢を放つて怪物の何が危害を加ふるはど近づかぬ間に殺して了つた。

それよりハークリーズは家畜を寄せ集めてオーシアナスの黄金の盃の中に追ひ込んで島から本陸へ運送した。後その家畜の幾頭かは夥しき蠅の群に襲はれて死んだのもあり盜賊に遭つて失はれたのもあつたが生残つたのを遙々マイシーネ市に連れ來ることが出來た。

(希臘神話)

その十三。第十一回の勞役。

黄金の林擒を得ること。

ハークリーズがシーリオンの冢畜をマイシトネ市に連れて来た後ユーリスシアス王は今一度前よりも遠く西の方日の没る先の國へ此の勇士を遣つた。この折王の口實としたのはヘスベリデツの國に生ずる黄金の林擒を三顆欲しいといふのであつた。

マイシトネの者は皆この評判の高い國のことを噂には聞いてゐたが誰あつて何所にあるといふことをハークリーズに告げ得るものはなかつた。遠く北の方にあるといふものもあれば遙に西の方にあるといふものもあつた。

さてハークリーズは出發して北西の方へ行き行きて遂にロン河に達した。その邊に河の女神が岩の間に遊んでゐるのが見えた。河の女神等がハークリーズに告げ

(希臘神話)

(希臘神話)

て海の神ニリアスがヘスベリデスの國のあり場所を知つてはゐるが容易には秘密を明すまいといつた。又告げていふには何事が起らうとも構はずニリアスを捕へて思つただけのことを聞き取るまでは手離すなとあつた。

河の女神の好意を謝してハークリーズはロン河の海に注ぎ込む所まで河に沿ふて下り日の没り月の昇るまで岩の影に待ち受けてゐた。

程なく奇怪な小さな老人が水から上つて来て濱邊で假寝み始めた。老人には短い角が細から生えてゐて長い髪と髭はさながら海草の纏れてゐるやうであつた。ハークリーズは直とはニリアスならんと見て取つたのでこの老いたる海神の寝入るのを見澄し突然駆け出して河の神が言つたやうに海神を引つ捕へた。

海神を引捕へたと思つたのが鹿の閃躍してゐるのであつた。やがてその鹿が海鳥になつて逃げ出さうとして叫んでゐた。海鳥が一變して三頭のある猛き犬となつた。三頭の犬が怪物シーリオンの姿になりシーリオンの又生き返つて来たやうに見えし

か前よりはもつと兇悍であるやうに思はれた。此間ハークリーズは彌これを引
き緊てゐた。終にニールアスはハークリーズを嚇して放させることが叶はぬと見た
ので再び持前の姿になつてハークリーズの要求することを尋ねた。

ハークリーズは唯へスベリデスの園に生ずる黄金の林檎を三個手に入れたいばか
りと答へた。亞非利加に下つて巨人のアトラスが世界を撐へてゐる所に行つたなら
彼はハークリーズのために林檎を取つて来るだらうとニールアスが告げた。

斯くてハークリーズは亞非利加に下つて行つたがその海岸に着くや否やアンテ
アスといへる怖ろしい巨人に襲はれた。この巨人を征伐するのは頗る困難であつた
その不思議に強い秘密は地の女神たる母のジリアが巨人の足が地に觸る毎に巨人を
彌強くしたからであつた。がハークリーズは斯くジリアの後援があるのを知てゐ
るので巨人アンテアスを高く地より引き揚げて置いて絞殺して了つた。この邊を
通行する旅人を皆殺して了ふのがアンテアスの習慣であつたがこれよりその恐れ

(希臘神話)

はなくなつた。

アンテアスとの闘が終つてからハークリーズは地上に臥して眠つてゐたが、
やがて夥しき昆蟲に刺されたやうな心地がするので目を覺した。起き上つて目を
擦りながら見たら土蜂ほどの小さな人民が群つて来てハークリーズが眠つてゐた間
に體の上に登つて来て小さな弓矢で攻めてゐるのであつた。これは侏儒であつた。ハーク
リーズは侏儒の合戦なるものが餘りに可笑しかつたのでユーリスシアス王に獻する
積でその三四人のものを、おのが獅子の皮の隅に結はつけた。

これよりハークリーズは長い間亞非利加をさ迷つた後頭巨人アトラスに巡り合
つた。巨人の如何にも疲れた様子を見て取り黄金の林檎三個を呉れたなら暫時代つ
て世界の重荷を背負つてやらうと云ひ込んだところが巨人は容易く承知した。

それでハークリーズはアトラスが林檎を取りに行つてゐる間世界を撐へてゐた。ハ
スベリデスの園の番人はおのが姪等であつたので黄金の林檎を取つて来るのはアト

(希臘神話)

ラスには容易いことであつた。

アトラスは僅の間に林檎を持つて戻つて来て今暫くの間ハークリーズが世界を擧へてゐて呉れさへしたなら自分がユーリスシアス王の許まで持つて行かうと往つた。こはハークリーズにいつまでも永く世界を擧へさして置かうとの下心であつた。だがハークリーズはその計略を看破いたので此方からも計略で應じた。彼はアトラスに挨拶してこの重みに堪え易くなる座褥が見當つたから鳥渡の間再び世界を持つてゐて呉れと云つた。でアトラスは再び世界を持つた。その折ハークリーズは林檎を受け取つたままアトラスが聲を揚げて呼び戻したけれども、忽らアトラスの聲の届かぬ先へ出で無事にマイシーネへの歸途に就いた。

その十四。第十二回の勢役。

下界から一體三頭の番犬を連

(番犬神話)

れ來ること。

ハークリーズ今は十二回の勢役の内十一回まで仕果せたので今一回だけ成功したならユーリスシアス王は否諾なしにハークリーズを自由の身としてやらねばならぬ。

(番犬神話)

第十二回の勢役は中一番困難でもあり危険でもあつた。そはブリュートーの王國に下つて行つてブリュートー王の一體三頭の番犬サーベラスをマイシーネ市に連れ來ることであつた。

必定ユーリスシアス王はこの一事は不可能であらうと思つたのでハークリーズが自由の身となる時はあるまいと考へた。若しこの勇士がブリュートーの王國に下るほど愚であつたなら又この世でその顔を見その聲を聞くことが出来なくなるであらうと思つた。

ヘスペリデスの國より西の方へ遠く隔たつて薄暗くて物凄しい森の中に二ツの巨大

な巖があつてその巖の間に深い空隙があつた。この空隙を深く深く大膽に覗き込む者があつたなら微かに水の閃めいてゐるのが見える——墨汁のやうに黒く見えてる水である。硫黄の臭のやうな不快な臭が邊に激んでゐた。鳥がその黒い水の上を飛ぶと忽ち逡巡してやがて眞逆に空隙に落ち込んで又と出て來なかつた。轟々と怪しき聲が折々そこに聞えた。こは物凄い下界のブリュートー王國に這入られる場所の一ツであつた。不界へはこれから這入れるには違ひないが、一旦この暗い穴に下りて行つたものは一人として戻つて來たものはなかつた。

されどハークリーズはこれまで恐ろしいといふことを知らないでこの空隙に下りて行くことをも恐れなかつた。彼は例の棍棒と弓矢と獅子の皮とを身に着けたばかりで下りて行つた。彼は巖の間を爬ひ下りて深い奥底に達し、それより長い暗い通路を歩いて到頭一ツの門に來た。その門の邊にて彼は上の山々の間にある裂口から來る微かな光で三頭蛇尾の犬のサーベラスが門を守つてゐるのを見た。

(希臘神話)

犬はハークリーズを見ると吠えもせず怒もせず氣味の悪い尾を振つて主人の王國に迎へんとする積りであるかのやうに進み寄つて來た。

(希臘神話)

ハークリーズは門を入つた。門を入つた折に塙の間から覗いてゐた夥しい物凄い幽霊どもが蝙蝠のやうに上下に鼓翼さしてゐた。

ハークリーズは暗い穴や狭い路をすん／＼と歩いて行つて遂にブリュートーの御座まで來た。彼はその時打ち明けてユーリスシアス王の命令は斯く斯くだと告げてサーベラス犬をマイシーネに連れ戻す特許を乞ふたブリュートーはハークリーズがこれまでの功勞を思ひ且は眞に勇士の名に負かざるの故を以て武器を使はずにこの犬を捕れといふ條件の下に特許を與へた。

斯くてハークリーズは門の方へ立ち戻つてみれば矢張りサーベラスは居たが前のやうに媚る様子はなくて齒をむき出し毛を立て、奈何にも怖ろしげに見えた。されどハークリーズは恐れなかつた。彼は素早くサーベラスを捕へ螺旋機のやうに

握りつめて歴伏して了つた。

ユーリスシアス王はハークリーズが現在サアベラスを引き摺りながら下界から戻つて来るのを見て御座から轉び落ちんばかりに驚いた。王は自分と自分の眼を疑つたが、今更奈何ともし難いので従兄弟を自由の身にしてやつたが、この強い従兄弟に吾が王國を奪はれてはならぬと思つたので二度とマイシーネの門を入つてはならぬと禁じた。されどハークリーズにはそんな異心はなかつた。

その十五。オリムパス山へ登る。

此の時ハークリーズの名聲は近隣のあらゆる王國に鳴り響いた。今はユーリスシアス王のために働らくの義務を免れたので隣國と戦を交へてゐるか又はその領内で盜賊や野獸の害に苦んでゐる王や貴族は争つて彼れが助力を得んことを求めた。それで尙爲すべき事が澤山あつた。ハークリーズは實際その身の休まる暇がなかつた。

(希臘神話)

(希臘神話)

つた。そは世のあらゆる災害を除くのがおのれの生涯の仕事であるやうな心地がある。るので人が頼んで来れば誰れの頼にも耳を傾けたからである。

遂に賢人タイリシアスが豫言したやうにオリムパス山に迎へ取られて神々と共に住む時節が到來した。そは斯く起つた。ハークリーズは勇士の面目として當然である如く或る王女と結婚した。デーヤナイラといふ新婦を吾が家に伴ひ來た折にハークリーズは水量の嵩まつた河に來合せた。奈何して渡らうかと思案しながら河岸に立つてゐると半人半馬の怪物が驅けつて來てデーヤナイラを背負ふて彼岸へ渡してあげやうと言つた。ハークリーズはその申し出を承知した。河を渡つて了ふと半人半馬はデーヤナイラを背負ふたまま丘陵を越えて疾く走りながら立ち去つた。そは新婦を盗む積りであつたからである。

ハークリーズが呼び戻すと却て益速く走せ去るばかりなので毒矢を一本射放つた。半人半馬は地に斃れた多頭の水蛇の毒が血管を傳はつて擴がつたからである。

半人半馬の息を引取る折に他日夫の愛を失ふこともあらばこれに其の愛を復舊す通
力があるといつて護符をデーヤナイラに與へた。實はこの護符が致命の毒であつた
をばハイドラの毒を含んでゐる半人半馬の血に浸されたものであつたからであ
る。

爾來幾年となくハークリーズ夫妻は共に幸福に暮らしたのでデーヤナイラは半人
半馬と護符の事などは殆んど忘れてゐたが、ある日のことむらくと嫉妬の炎が彼
女の胸のうちに燃えて來た。

此の時ハークリーズはユタア山の上に粗い岩で祭壇を築いてゐた。神々に犠牲を
捧げる準備をしてゐた。残りなく準備が整つたのでデーヤナイラの許に使を遣つて
犠牲用の禮服を取り寄せやうとした。

デーヤナイラは注意して藏めて置いた櫃から禮服を取り出して久しい以前に自分
の手細工で出來た縫箔の美麗なのを我ながら歎賞しつゝ引き展べた途端に小さな包

(希臘神話)

希臘神話

みかその折目から床に落ちた。その落ちたのは半人半馬の護符であつた。

「噫、半人半馬はこの護符の入用な日があるのを豫て知つてゐたのであらう、これ
で吾が夫ハークリーズの愛が取り返せるであらう」と呟いた。

その時烈しい毒を用ゐてあるとは夢にも知らないでデーヤナイラは藥罐に湯を沸
し小さな包の中にある物をその中に入れた。かく調製へたものの中に禮服を浸して
その乾くのを待つて直とその禮服をハークリーズの許に遣つた。

ハークリーズは使者の歸るのを待遠しく思つた。禮服は遂に持つて來られたが不
快な臭がした何んだか覺えがあるやうでもあつたが思ひ出せなかつた。

が遅くなるのでハークリーズは急いでその禮服を取つて肩に投げ掛けたと思ふ
うちに火の中に包まれたやうな心地がした。有頂天になつて祭壇を毀ち大木を幾本
となく根抜にし使者を引つ摺んでユタア山の嶺を越えて海中へ投げ込んだ。

毒の苦痛が漸く和いて來た折にハークリーズは是れ吾が最後なりと覺悟した。苦

惱のうち自分の引き抜いた大木を累ねて火葬臺を作りその上に乗り獅子の皮を擴げ根棒を枕にしながら臥した。

やがてハークリーズの朋友等がエタア山の騒動を聞きつけて何事ならんと見に來た。ハークリーズは朋友の中自分の一番近くにゐた一人に頼んで火葬臺に火を照けて呉と言つた。この朋友は大に悲みながら歩み寄つて火把の燃えてゐるのを大木に附けた。

時に驚くべき事が起つた。蛇が古ぼけた皮を脱いで光澤やかな新しい鱗で出て來るのを見ることがあるが丁度これに似た變化がハークリーズの身に起つた。それは彼がこれまでに爲果せた勞役や艱難辛苦の數々が發展して彼がために不死の精神となつた。その死すべきだけのものは皆燃えて灰となつたが、不死のハークリーズ眞のハークリーズは燦爛たる榮光を示しながら火中より現れた。

やがて虹が空に現はれた。それは女神使アイリスの橋であつた。間もなく頭の上の

(希臘神話)

浮雲が散じて燦然たる光彩を帯びたアイリスと翼のついてる履を穿いたマアキーユリが天から大地へと虹の橋を輕々と降りて來て不死のハークリーズ、榮光ある新ハートクリーズをオリムパス山に案内して永遠に神々の内に存命させた。

(希臘神話)

○シーシユース

その一。シーシユースの雅典に來た由來。

シーシユースと母のイースラがトリゼンといふ所にある大きな淋しい山の麓に住んでゐた。ある日シーシユースの未だ物心を知るぬ長い前のごと父のイーシユースが山腹の松林の中にイースラを伴ふて來た。そこにあつた巨大な岩を扛げてその下に自分の劔と履とを埋めてその岩を元の所に轉ばしながらイースラに告げてシーシユースが此の岩を扛げ得るほど強くなつたら劔と履とを取らせて雅典にゐる父

の許へ歸るがよいと言つた。これがイースラの夫と永く別れる名残であつたが夫はアチカス王であつて雅典の美しい市にて王位に在ることをイースラは知つてゐた。遂にシーシユースが成人して大きな岩を扛げ得る時節が來たので岩の下から劔と履とを取り出し履には劔を帯び足には履を穿き、疾く雅典に出發しやうとしてゐた。

その時分にはトリーゼンと雅典との間の國は荒れてゐて岩が多かつた。岩の背後に巨人や盜賊が匿れて旅人を襲ふ用意をしてゐた。で海路を取る方が安全であつた老衰してゐたイースラの父は海路を取つた方がよいと思つたがシーシユースは「否私はお父さんの立派な劔を持つてゐるではありませんか。陸を參りませう何か危険なことにでも出遣へば尙面白いです」と言つた。

それでシーシユースは母と祖父とに別れを告げて陸路を旅行し始めた。トリーゼンに近い峨々たる巖の間を未だ遠くも行かぬ前にペリフキーチズといふ盜賊に襲は

(希臘神話)

(希臘神話)

れた。この盜賊は大きな鐵の棍棒を打ち振りながらシーシユースの方に走せて來た。奈何にも怖ろしい狀であつたがシーシユースは父の劔を提げ勇ましく進み寄つて忽ちこの賊を路頭に屠り殺した。雅典への道筋はこれで安心が出来るやうになつた。シーシユースはペリフキーチズの持つてゐた大きな鐵の棍棒を取つて前へ進んだ。次に行き遣つたのはサイニスといつた巨人であつてこの巨人は通り掛つた旅人を捕へて裂き殺すのを常としてゐた。二本の松の樹の梢を曲げて置いてその間に生擒つた人間を結はへ附けた上にて松の樹を反彈へらせて裂き殺すのであつた。サイニスは松の棍棒を持ちあるひた。この棍棒も大きくはあつたがシーシユースが現に持つてゐた鐵の棍棒ほどには強くなかつた。さてサイニスが二本の松の樹の梢にシーシユースを結へ附けやうとした折に初めて強敵に會つたことが分つた。そはシーシユースの鐵棒がサイニスの松の棍棒を一撃の下に打ち碎き更に一打ちか二打にてこの巨人を松の樹の下に斃したからである。

シーシユースが雅典への道中を未だ甚だ遠くは往かぬうちに或る村に來かかつたが村人は皆猛烈な野猪が一頭ゐるのを怖れ恐れて目を送つてゐた。シーシユースはこの動物を見つけて出して殺した。

それより尙進んである内海の濱邊に出たがここには盜賊のアイロンといふ者が住んでゐた。アイロンの方便は旅人等を歓迎する風に見せかけ吾が家に泊らせんとて彼等を案内し自分は高い崖の端に煙を占めここで客人等に足を洗はせて置いて餘念なく洗つてゐる隙を見澄まし崖から海へ蹴落すのであつた。がシーシユースがこの道を通つて以來は又とこんな事を爲なかつた。それはシーシユースがあへてへにアイロンの崖から海へ投げ込んで了つたからである。

それより左程遠くもない所に今一人の盜賊のブローラスと云ふのが住んでゐた。この賊は遠來の客を吾が家に招いて饗應する風に偽るのが常であつた。やがて客人を寢臺に就かせ身の丈が長すぎたなら首か足を斬り棄て短すぎたなら恰好の

(希臘神話)

長さに無理遣りに引き延ばすのであつた。此の賊も亦シーシユースに殺された。その後も賊や巨人等にて同じ運命に落ちたものがまた外にもあつた。

シーシユースが雅典に着いた頃には彼が名はよく市民に知られてゐた。沿道の人々が彼の手柄話を廣く傳へやうと熱心したからである。實に雅典の内では彼が來るのを少も知らなかつたものは唯一人しかなかつた。その一人とは彼が父のイーシユースで雅典の王であつた。

此の時に評判の高い魔術者でミーデアといふ美女が王宮に住んでゐた。この美人に一人の息があつてイーシユース王が世を去つた後はその息を王位に即かせやうとしてゐる矢先にシーシユースが雅典に來たのを悦ばないのは自然の人情でもあらうがこれがミーデアに極めて悪しき行をさせる原因となつた。

ミーデアは毒草の事に明るのでこれを調合して激烈な毒藥一碗を製した。これを飲めばその體で死のほぞの毒藥であつた。やがて王に告げてあの青年の客人は誰

(希臘神話)

叛人であつて王の生命を取らんとすの計畫をしてゐると云つて彼女はシーシユースが王の前に出た折にこの毒杯を王の手より彼に渡して飲ませるやうにと計らつた。毒が入つてゐるやうとは思はずシーシユースは何氣なくその毒杯をわが唇まで擧げた。丁度その折王は彼が腰に帯びた劔に目をつけその象牙の欄の彫物を見て謀叛人と謂はれてゐるのは我が子息であつたのが分つたので直ぐ彼が手からその杯を敲き落し親子の情を以て青年を歓迎した。

ミーデアはおのが悪事の露見してシーシユースが父に認められたのを見て驚き怖れた。

彼女は尙此の上シーシユースに敢て害を加へやうとはし得ないで只管おのが罪を無事に免かれやうとあらん限りの魔術を使つた。先づ河から濃霧を立ち昇らせ次に霧のために空の俄に暗くなつた混雑に紛れて翼のある龍を呼び起し車に飛び乗つて忽ち遠く雅典を逃れ出て敢て又戻らうとは得せなかつた。

(希臘神話)

人民は時を移さずシーシユースがトリイゼンから来る途中でなした勇猛な行を残らず王に物語つた。王は子息の功名談を聞き無事に雅典に來たのを頗る満足に思ひ公衆のため三日間の歌舞遊宴を設けた。宴酣なる頃一人の使者が來て貢物の取集め人がクリート島から着いたと王に告げた。

(希臘神話)

久しい前にクリート王マイノスの長男が雅典で殺された。その復讐のために王は大軍を率ひて雅典を襲ひ人民に逼つて九年毎に雅典の門閥家の子女の中より七人の少年と七人の少女を貢物として王に納めさせることに約束した。貢の小供といつた少年少女は血に濁した狂想な生物のミノータアに食はされて了ふのだと私語くものがあつた——ミノータアはマイノス王の宮殿の近くにある螺旋(螺旋形の通路)や階段を設け出入に迷ふやうな構造の建物)の内に養つてある體は人間で頭は牡牛の怪物である。これまでこの螺旋に入つたものは誰れ一人又と出て來たものはなかつた。その残忍な貢物を雅典人は既に二度まで納めたが今は三度目の分を納めねば

ならぬのである。

シーシユースは直に怪物ミノータアーを殺し買物を廢しやうと決心した。イーシユース王はその非を説いたがシーシユースは聞かれない先に自から進んで七人の少年の二人に加つた。この事が雅典人を悦ばせシーシユースの人氣を引き立てた。定まつた日に外六人の少年と七人の少女が闇を引いて極つたとして彌出帆の用意が出来た。こんな悲しげな旅立ちをするには買の子供を乗せた船に黒い帆を掛けるのが似合はしかつた。此の前に買を納めたときには二回とも黒帆をあげたのであつた。今度の船旅には面白い結果があらうとの望があるので王はシーシユースに白帆を授けて首尾よくミノータアーを殺して無事に歸航の途に上ることが出来たなら黒帆に代へてこれを舉げよと言つた。やがて年老いた王は子息に別を告げて「余は彼所の巖から毎日汝が歸つて来るのを見張つてゐやう」と言つた。

やがて黒い帆を舉げた船が徐に港から出ていつた。乗つてゐた若い人々は酷く悲

(希臘神話)

んでゐた。これが希臘の陽氣な海岸の見納めであらうと思つたからである。少年どももシーシユースの外は一人もさう思はないものはなかつたからである。シーシユースは父の剣を腰に帯びて雅典に出發した折のやうに快活であつた勇氣に満ちてゐた。

(希臘神話)

その二のミノータアーを殺すこと。

買の子供等がクリト島に着いた時シーシユースはミノータアーを殺す積であることをマイノス王に報告した。王は王子にして若しこの仕事を爲果せたなら王子とその一行は勝手にこの地を去つてもよいといふことや以後は買物のことに付て何も要求がましいことは申すまいと告げた。

買をいへばこの怖ろしいミノータアーは受獸として飼ひ馴らすべきものではなかつた。常に螺旋から躍り出でて果しのない損害をなす懸念があつたからである。そ

れでマイノス王も實は斯んな禍の原因となるものから免れ得られるものなら悦んで免れたであらう。されど無情にも武器を身に附けて怪物に手向ふのを許さなかつた。随つてこの勇士が成功のほども覺束なく思はれた。

その夜年若い雅典人等は王宮の下にある牢屋に投げ込まれたその内一人は翌朝ミノータアの朝餐となつて了ふ筈になつてゐた。

この牢屋の直と上にマイノス王の二人の王女アリアドネとフキードラの部屋があつた。姉妹の王女が壁の際に立つて月を覗てゐると四人の歎いてゐる聲が聞えた。

「まあ何んといふ氣の毒なことせう、ここにゐる少年や少女がミノータアの食べ物になるのですと、分けてお氣の毒なは若い王子のシーシユースさんですわ、あんなに勇ましいお方なのに、貴方さへご承知ならお互にお方をお助け申してミノータアを殺しませうや」とアリアドネが言つた。

フキードラも若い王子を助けるのはアリアドネに劣らず熱心であつた。それで姉

(希臘神話)

(希臘神話)

妹のものは首尾よく行きそつな工夫を運らした。

姉妹のものは王の一家族の寢靜まるのを待つてやがて靜に牢屋へ忍んでいつて扉を開いた。シーシユースの外囚人は皆疲勞と心痛に氣力も盡き果てて寢入つてゐた。但シーシユースばかりははつきりと眼を覺してゐた。アリアドネは出て來るやうにと彼を手招きした。やがて姉妹二人でシーシユースを名高い螺堂の立つてゐる場所へ連れてゐつた。白い大理石の壁が月の光を浴びて奈何にも高く奈何にも堅固に見えてゐた。波が海岸を噛む音の外夜は靜であつたのでシーシユースの耳に眠つてゐるミノータアの高聲かいてゐるのが分明と聞えた。

「今がこの怪物をお撃ち遊ばすに屈竟の時でございます、朝までお待ち遊ばしてはよろしくありません」とアリアドネが小聲でいつたとしてシーシユースもその通りだと思つた。

「ミノータアの隠れ窩は螺堂の奥底にござんす、野の音を頼りに遊ばしたら目ざ

その方向がお分りになりませう、さあ劔も持つて参つてゐます案内糸も用意して参りました怪物をお殺し遊ばした上はこの糸を便りにさへ遊ばせば戻り路がお分りになるのでござんす」と言葉をつなぎながら劔と案内の糸を渡しにして彼女は糸の片端をわが手に持ちやがて秘密の通路より螺堂の内に這入れる扉をシーシユースのたぬに開いた。

シーシユースは右手には劔を掲げ右手には糸巻を持つて螺堂に這入つた。内蔵は都て高い壁で隔つて狭い路に仕切つてあつた。この細路の多くは行き止つてゐたのでシーシユースは同じ路を行き戻つたことが度々であつた。この螺堂は高名な工匠ヂツダラスの造つたもので螺堂の数はあれどもこれほど半分も紛綜つたのは又と外には例がなかつた。シーシユースは行きつ戻りつ入りつ出つしてゐた。朝分明と高野が聞えて来たので怪物のゐる窩に漸近づいて来たのが分つた。朝分明と

その間アリアドネとフキードラは門に立つてゐた糸の端を握つてゐるのはアリア

ドネであつた。二人は長い間待つてゐた。月は山の背後に隠れて星の光ばかりが残つた。やがて一聲高く吼る音がして螺堂の堅固な壁を震動させた。それより天地は再びひつそりと鎮まつた。シーシユースは螺堂の内に死んでゐるものと思はれなかつた縦やミノータターに殺されなかつたにせよ互に固ひ合つた際、糸巻を落して入り組んだ細道を踏み迷つてゐるのであらうと今はアリアドネも待ち侘びてゐた遂に糸を引き緊むるやうな心地がしたと思ふ間にシーシユースがミノータターを殺したと言ひながら出て来た。

幸にシーシユースとその一行をクリートに乗せて来た船はまだ濱邊に繋いであつたので天明前にマイメス王の許を逃げる事が出来た。牢屋に眠つてゐる少年少女を素早く呼び起し船の籠を解いて雅典に向け早や出發せんばかりの用意が出来た。

船に乗り込む前にシーシユースは吾が一行と共に雅典に参られよと姉妹の王女に

求めた。「王女等が私をお助け下さつたことが父君のお耳に入つたなら定めしご立腹に相成ることと御座らう、父君の逆鱗をお避けに相成るにはこれより上策は御座るまい」とシーシユースが云つた。

マイノス王の逆鱗を恐れたので二人の王女はこの誘引を承知した。

雅典への歸り途に一行はナクソス島に船を止めた。ここに少年等は日夜船を漕ぎ續けた疲勞のため是非とも休息を取りたいので船を濱邊に曳きあげその夜一行は裸岩の上に野宿した。翌朝早く帆をあげて再び出發した。がアリアドネは岩の上に熟睡してゐたので後に取り殘された。

王女は目を覺してまさかシーシユースは態と自分を見捨てる積ではあるまいと思つた。けれども船は波の上に躍つて殆んど見えなくなつてゐた。王女は涙のために船が水の面に見えなくなるまで見つめてゐたが折しも異様の音楽が聞えた平鼓（一面に皮を張り周圍に鈴を附けた平太鼓にして手にて撃つ）や笛の音や銅鈸の響が耳

(希臘神話)

に入つた。

王女は背後の松の林から樂器の音がするのでその方を振り向いて見たら二頭の豹が曳いてる車が目についた。車の中には葡萄樹の神のバッカスが斑紋のある鹿皮を着け涼しげな常春藤の葉の冠を被つて乗つてゐた。林を通つて來る折にバッカスは牽牛花の蔓をおのが鈴に巻きつけて鈴の穂先に大きな松の毬果を突き刺してゐた。バッカスは林の女神や半人半馬の神の快活な舞踏團に取巻かれてゐた。

バッカスはアリアドネの物語を聞いて言ふには「シーシユースは是非とも汝を雅典に連れて行く筈だ、汝が彼を助けてやつたことを思へば少くとも汝を女王に取立てるのが當然だが、憂ふることはない、汝は誰から貰ふのよりも勝つた冠を貰ふであらう、斯く言ひながらバッカスがアリアドネの頭の上に九ツの燦爛たる星のあゝる冠を被せた。後バッカスは他の神々に説き勸めて彼女を空に登せ神々の仲間に入らせた。今でも北の空に彼女の冠が燦然と光を放つてゐる。

(希臘神話)

シーシエースは斯く勇武であつたが奈何にも物忘れし易い少年であつたと見える。彼はアリアドネを島に取残したばかりではない、事が首尾よく運んだなら歸航の折には白帆を揚げる約束をして置きながらそれをも打ち忘れた。斯くて船は不吉な黒い帆をあげながら雅典に戻つて来た。

岩の上から見張つてゐたイーシエース王は黒い帆のあがつてゐたのを見て吾が子息は死んだものと思つて海に身を投げ溺れて了つた。それで貢の子供等が斯んな危き旅をした上で無事に港に着いた折に耳に入るものは歡喜の聲ではなくて哀悼の聲であつた。

シーシエースが王の位についた後は母のイーステを雅典に迎へて善く老後の世話を看た。彼は國を治むること賢明であつて且貧しき者や薄命の者を憐んだ。

○フネーリーモンゴベーンシス

低い山々で圍まれた或る谷に會て甚だ悪い風儀の村があつた。旅行してこの村を通つた他郷人は痛く村人の無情について怒みを言つた。偶この村を通りかかつた旅人が足は疲れ腹は減つたので接待を望んで戸口の開いてる家をおとなへば眼前にガタビシと戸を閉ぢ栓を挿す音が聞えるまでのことだとの噂であつた。こればかりではなく石を投げつけられたりなどして酷く虐待されたものであつた。斯んな風聞がオリムバスの神々の耳に入つたのは何も不思議ではない。

一日のこと普通の旅人とは稍風體の變つた二人の他郷人がこの村を通りかかつた日は暮れて夜氣深々と寒く人の膚を襲ふた。二人の者は軒別に戸を敵いたが戸内に入れてやらうとするものは誰れもなかつた。到頭村中隈なくおとなふて入れたものが唯一戸あつた。

その一戸は大きな沼の岸にあつて他の家よりは少し懸け離れてゐた。二部屋しかない小舎であつて屋根は藁と藁で葺いてあつた。この家にはフキリーモンとペーシスといつた老夫婦が住んでゐた。

この夫婦は他の村人とは違ひ旅人に石を投げたり犬を吠えつかせたりその來問ふのを知つて戸を閉ぢたりしやうなことは夢にも思はなかつた。彼等は却つて戸を開けて二人の客人を我が家に呼び迎へた。

この小舎の戸口が奈何にも低いので二人の客人の中身長の高い方は這入る折に頭を屈めなければならんほどであつた。二ツの部屋の内には殆んど家具がなかつた。がフキリーモンとペーシスは貧乏ではあつたが心を盡してこの二人の客人を歓迎した。

ペーシスは埋火の灰を散けて柴を加へたのでやがてその柴は小さな藥籠の下にバチバチ燃えてゐた。湯の沸いて來る間に菜園から野菜を摘んで來てそこに座つて野

(希臘神話)

菜の葉を引き剥いでゐた。

その間にフキリーモンは頭の上の梁に懸けてあつた燻豚肉を取り下ろしてその一片を切り取りペーシスに料理させた。

やがてペーシスはグラ／＼した脚の弱い食卓を持ち出しを平に据るため脚の一本の下に木片を挿し込んだり一握りの薄荷でその食卓を磨いたりした。次に自分の菜園に出來た無花果の實五ツ六ツと焦茶色の麵包と手製だが美味い葡萄酒一瓶とを食卓の上に置いた。燻豚肉と野菜が出來たので幾個かの新しい卵を餘爐の中に入れて焼いた。さて食事の用意が出來たので二人の客人を案内して食卓に就かせた。

フキリーモンとペーシスとはかりであつたなら食事といつても高々焦茶色の麵包と手製の葡萄酒と燻豚肉の小片位のものであつたらうがペーシスは客人が疲れもし餓えもしたらうし且はこの珍客に瘦せ所帯が許すだけの接待をするのは自分の義理だと思つた。

(希臘神話)

食事の初めから如何にも不思議なことがあつた。葡萄酒のコップは右から左へと飲み廻しにしたのにいくら飲んでも飲んでもいつも一杯に満ちてゐた。

老夫婦はこれを見て驚いた。人が知らずに神々を饗應してゐる折に斯んな事のあるのを噂には聞いてゐた。つくづく客人の様子を視ると丈の高い方は奈何にも氣高い威光があるのが分る。今一人の方は顔つきが始終變つてゐたそしてその輝いた眼さしには悪戯の相があつた。

さて老夫婦の心の中に先づ浮んだのは斯様な客人に對しての接待が奈何にも物足らないといふのであつた。ペーシスは椅子から躍り上つて鷺鳥を捕りに駆け出した夫婦の手に残つてゐたのは此ればかりであつたがそれをも料理する積なんであつた。フキトリーマンが妻のペーシスに手を貸して鷺鳥を捕へやうとしたが老夫婦の視力が弱いので掴まへることが出来ない、鷺鳥は大きな白い翼を揚げてあちら此方へ走り廻つて到頭家の内へ翔け込みまともに二人の客人のゐるところまで逃げた。客人

(希臘神話)

(希臘神話)

は殺さないがよからうといつた。

その時客人は老夫婦に身元を明かし且村へ來た事由をも告げた。客人はジューピターとマアキユリーであつた。二神は村人から虐待された旅人等の苦情を聞いて果して村人が評判のやうに不人情であるか否やを視察に來給ふた。實際風聞の通りであつたので斯んな人民は罰せずにはおけないと二神が宣ふた。

二神は村人の惡風に染まつてゐない老夫婦に向ひ吾等に從つてこの山腹を登れと宣ふた。圓い月が出てゐたので夫婦の老眼にも殆んど晝のやうに分明と見えた。山の巔に登り着いた頃ジューピター神が老夫婦に振り返つて村を見よと宣ふた。家々は徐々と下に沈んでいつて見えなくなつたと思ふうち其の跡に湖水が出來て今まで村があつたとは思へないほど月の光を浴びて平和な狀に見えた。村人は誰れ一人又と再び見えなかつた。

次でフキトリーマンとペーシスの家に變化が起つた。葉葺の屋根は黄金のやうに

黄色に見え始め壁は白くなつて黄金の屋根を戴いた大理石の寺が出来た。

ジューピター神が老夫婦に何なりと望のことあらば、申したがよいその望は叶へてやらうと宣ふた。老夫婦は二人が同時に死んで互に愁傷をかけないのが何よりだと言つた。その折二神は消え失せて老夫婦は山を下り彼の大理石の寺にて僧となり尼僧となつて幸福に多くの年を暮した。

その後長い長い年月を経てある朝早く数人の農民が産みたての卵數顆を土産物にしてこの老僧と老尼を寺に訪ふた。寺に来て見ると不思議なことには二本の美事な老木が寺の玄関前のこれまで樹も何もなかつた所に立つてゐた。一本は樺で一本は菩提樹であつた。農民等は奈何にも不思議に思つた。フキーリーモンとペーシスを尋ねても影だに見えない又とその國に見えなかつたが、二本の大木は寺が古びて頽れた後までも幾百年となくそこに立つてゐた。通りかかつた旅人等はこの老樹の木蔭に憩ふて不人情な村人のことやフキーリーモンとペーシス夫婦のことを互に語り

(希臘神話)

合ふのが常例であつた。

(希臘神話)

◎オアフユースとユーリーデシー

アポロ神の子息のオアフユースは驚くべき音楽家であつた。自用の琴を所持して若い時分からそを弾くことを習つた。この琴はアポロ神の黄金の琴ほどには立派なものではなかつたらうが兎に角驚くべき音色が出た。

オアフユースは村外れの淋しい所に行つて岩に腰掛け終日弾くことが度々であつた。その折蜘蛛は網を張ることを止め蟻は往來を休み蜂は蜜を集めることを忘れた。いづれも斯んな美しい音楽をこれまで聴いたことがないからである。草の中に巢を構へてゐる小鳥は珍らしい唱歌者の新に来たものかなと怪んでオアフユースの周圍に集まつて聴いた岩の上を跳び廻つてゐるのもあれば長い草の上に鞞してゐるの

もあつた。そして音曲を聴き取らうととしてゐた。

ある日毒蛇が地上の巢の中の小鳥の卵又は雛を見付けやうとして草の下を用心深く滑りながら音楽を聞きつけて止つて聴いてゐた。蜷局巻いて頭をあげ音楽に調子を合せて頭を後や先に振つてゐた。音楽の鳴り渡つてゐる間は小鳥も毒蛇を怖ろしいとも思はなかつた。

オアフユースの齡の長ずるに随つて彌その音楽は驚くべき妙境に入つた。彼が琴を携へていつもの所に来れば野や森の鳥や獸は皆彼が周圍に集つた。獅子や熊や狼や狐や鷲や鷹や梟や栗鼠や野鼠やその他多くの生物が聴衆の中になつた。附近の森の樹々ですら自分と根を引き折つて來て能く聞ゆる様にオアフユースの周圍に環形に並んで立つた。樹々の枝は日中の熱い光線を遮つて他の聴聞者やオアフユースの頭上に快き影を投げた。

谷の女神等は忽ちオアフユースと交際をした。して彼が大人と成つた時ユーリデ

(希臘神話)

シーといふ谷の女神の一人がその妻となつた。

一日ユーリデシーが不用意に牧場を走つて通つた折に岩の下にゐた毒蛇を踏んだ。この毒蛇はオアフユースの微妙な音楽の感化の下にあるときは常に柔和であつたが外の時にはさうは行かなかつた。毒蛇は忽ち振り向いて、ユーリデシーの脚踝を咬んだ。

それでユーリデシーはブリュートーが王であつてプローサアバインが女王となつてゐるあの暗い下界に降らんければならなかつた。オアフユースが牧場へ戻つて來たらユーリデシーが見えなかつたので琴を取つて彼女を呼び立てながら山々や谷々を隈なくさ迷ひ廻つて極めて美妙な極めて感に入るべき曲を弾いた。彼女の姉妹神も共々に尋ね廻つたので山々到處の所にユーリデシーやユーリデシーやの叫び聲が反響したが何の答もなかつた。

オアフユースはユーリデシーを行方不明のものと諦めて了ふことが出来なかつた。

(希臘神話)

地上の隅々まで捜しても見當らぬ上は下界に居るに違ひないと思つた。彼は下界に降つてブリュートー王の前で琴を弾かうと決心した。ブリュートーとプローザアバインを説いて彼女を再び陽氣な谷へ連れ戻すことが多分出來やうと思つた。

さてオアフユースはブリュートーの王國に下つて奈何にも美妙な悲痛な歌に合せて琴を弾いたのでこれを聴いたものは皆涙を浮べた。人々が頗る殘忍の王と思つてるブリュートーですらこの唱歌者のために氣の毒に思はずには居られなかつた。

歌ひ了つてオアフユースはユーリデシーを連れずには歸れないと言つて上界へ彼女を伴つて歸ることを許して呉れと歎願した。ブリュートーは一ツの條件の下に彼女を去らせやうと約した。その條件とはユーリデシーが自分の背後に隨いて來るものと信ずるだけの誠意があつて上界に着くまでは振り返つても見るなといふのであつた。

かくてオアフユースは靜に琴を弾きながら再び立ち戻つた。音樂はもう悲しくは

(希臘神話)

(希臘神話)

なかつた。下界はいつも暗いのであるから暗闇のうちをユーリデシーが隨いて來たがオアフユースにはこれも暗とは分らなかつた。彼は徐に岩の上の險しい路を登つて明るい暖かな世界へと戻つた。漸く住み馴れた世界に達した頃海からの新鮮な空氣を額の上に感ずることが出來、日光の閃きが岩に反射するのが見える頃になつて不圖ユーリデシーがそこにゐないやうな心地がした。ブリュートー王に欺かれたのではなからうかといふ考が起つた。振り向いて見ると通路に漏れて來る朦朧たる光でユーリデシーが消え失せて下界へ沈んで行くのが見えた。彼女はオアフユースの方へ腕をさし伸べてはゐたが今更追つ附かなかつた。彼がブリュートー王と約束した條件を破つたがためにユーリデシーは暗い陰の裏に戻つて行かねばならぬのである。

振り向いて見さへしなければ宜かつたに噫さても……ユーリデシーは既う居ないものとなつた。再び世界に連れ戻らうとしてもそれは無益だとオアフユースは諦

めた。彼は自分の生立つた美しい谷には歸らないのである淋しい山に行つて住まひユ
ーリデシーを吊ひながら一生を送つた。

彼が琴の音は聴く人の 胸を断つほど今は悲しくなつた。風が北から吹いて来る
山の麓に住んでゐる者には微かに哀しい棹ましい琴の音が聞えた。七ヶ月の間は殆
んど毎日山から聞えたがその後は北風が吹いても音曲はもう聞えななんだ。オアフエ
ースは電に打たれて死んだといふ者もあればその山をさ迷つてゐた半狂の婦人
仲間のミーナツドに引き裂かれて死んだといふ者もあれど眩とは分らなかつた。

オアフエースの琴はヒプラスの河を漂ひ流れて海に落ちた。その流れるとき水の
浮き沈みにつきて美妙な音を放つてゐた。ある日波が高くあがつたので琴はレーボ
ス島の海岸に打ち揚げられて葡萄蔓や草花が一面その上に生ひ茂り落葉の下に埋れ
たままでそこにあつた。其島にゐる 鷲は外の所にゐるのより一際美音で歌ふとい
ふ噂であつた。

(希臘神話)

◎ガニミード

ガニミードといつた珍しい美少年が一日トロイ市の近邊の丘陵で遊んでゐると俄
に黒雲が起つて日光を遮り不意の風が塵を吹き立て木の葉を飄へして、電が閃き雷
が鳴つたと思ふ間に巨大な黒鷲が突然雲の間から降りて来てガニミードを掴みあげ
て舞ひ去つた。

ガニミードの父のトロス近邊の野原にゐて有りし次第を見て取り聲を揚げて走
せつけ舞ひ上つて行く鳥に棒や石を投げつけたがガニミードの遊んでゐた丘陵にト
ロスが未だ來着かない前に遠く去つて棒や石などは逆も届かなかつた。

斯くて憐れな父は悲歎の餘り家に戻つて有りし次第を妻に語つた。隣近所の者も
その話を聞きつけて皆トロスの家に集り泣き沈める父や母と共に悲んだ。鷲はその
國の山々を越えて遠く攫へ去つたので今更ガニミードを捜す證もなかつた。

(希臘神話)

その後二三日過ぎて見知らぬ客人がトロスの家を訪ふた。客人は蛇の捲き附いて
る奇異な棒を携へてゐたとして二ツの翼が帽子の上で羽撃ちしてゐた。その客人が
言つた「ガニミドの事を嘆いては宜くない、あの少年は奈何にも仕合であつた。
容貌が美しいのでジューピター神に愛せられて司酌者となつてこの神々の王のため
に紅玉色の天酒を黄金杯に注ぐのである。彼は死なないであらう又年老いもせない
であらう」
トロスは此の言葉を聽いて慰められた。

◎風の袋

イーオーラス(風の神)王の島といふのは遙に陸地を離れて海の中央にあつた外の
島の様に一ツ所に落ち附いてゐないで徐に水面に漂つてゐた。島の真中に王宮とも

(希臘神話)

王城とも言ふべきものがあつた。峻しく滑らかな青銅の胸壁の堅固なのが王城の周
圍を繞つてゐた。此の所に風の神イーオーラスが六人の息と六人の娘と共に住んで
ゐた。

(希臘神話)

イサカの王であつたユーリツシズがトロイの戦から故郷へ歸へるとき海路に
迷ふて酷く長い航海をなし多大の艱苦を嘗めた後ある臣下の者ともイーオーラス
王の浮島へ着いた。

ユーリツシズ王の一行は茲に歓迎された。イーオーラス王は一行を宮殿に泊ら
せて一ヶ月の間懇に接待した。一行が故郷へ立歸らんとした所にイーオーラス王は
牡牛の皮で製して銀の細で結へた大きな草袋をユーリツシズ王に贈つた此草袋の
中には一ツの風を除いて外の風は皆這入つて居た。その一ツの風といふのは西風で
あつた。その西風をイーオーラス王は態と除いて入れなかつたのは船をユーリツシ
ズ故郷へ吹き寄せさせんがためであつた。イサカは東の方にあつたからである。

水夫等はイーオーラス王が此の大きな革袋をユーリッシーズに手渡しするのを見たが何が遺入つてゐるものとは知らず唯何か大層貴いもので多分黄金だらうと思つた。それが輝つた銀の繩で結へてあるのを見てその結び目を解くことが出来やうかと密に怪んだ。

ユーリッシーズは水夫等が物珍らしげに目を附けたのを見て少し疑念が起つたので毎夜夜を徹して居直つたまま自分で船の舵を把らうと決心した。

一行は徐に吹き来る西風を受けて萬事都合好く出帆した。九日九夜の間西へ西へと航してイサカの山々の峯が見えるまで走つた。この間ユーリッシーズは始終舵を把つてゐた。益々水夫の動作に疑念が起つたからである。

しかるに水夫等は互に耳語いてあんな大きな寶袋を王が持ち歸るのに手を空うして餘所見してのみゐるは心外だと云つた。追々とイサカの海岸が見えて來た。自分達の籠からあがる煙さへ見えて來た。しかも長い年月待ち侘びた光景であつた。

(希臘神話)

(希臘神話)

ユーリッシーズは既うこの上目を覺してゐるのに堪えきれなかつた。陸が見えて來て航海はこれで殆んど終つたと思つたらスツカリ疲れて舵の傍に打ち伏して寢入つて了つた。これが水夫等に待ち侘びてゐた機會を與へた。ユーリッシーズの臉が塞いだと看るや否や袋に跳び附いて銀の繩を解いた。

風が突出した。同時に四方八方から船を壓した。船は獨樂のやうに廻つた。海は攪亂されて細かい水煙が高く濃く揚つて宛然吹雪のやうであつた。その折大風が東から吹き起つて來て到頭ユーリッシーズ王の一行は又元のイーオーラスの島に吹き戻されてゐた。

がイーオーラス王は二度まで一行に助力しなかつたので自分等で骨を折つて元來の時のやうに帆を揚げねばならなかつたので再び故郷へ歸つたのはそれより長い長い後の事であつた。

◎サアーシー

その一。紫の啄木鳥。

ある日、ネカス王が王宮の近邊の森の中で野猪を狩してゐた。王は活潑な黒馬に乗つて護衛兵に取り巻かれてゐた。この王は美服を装ふのを好んだので獵をするにも冠を戴き黄金の扣子で結束した紫の袍を着てゐた。

森は美しい所であつた。樾の大木が蔽ひ茂つてゐて日光も枝に遮られてさし込まなかつた。王は日頃馬に乗るのとこの森で狩するのを好んだが、この森には危険な隣人が屢來往したので他の場所にて保養したなら王のため得策であつたのだらう。

この隣人とは評判の女魔術者サアーシーの事である。彼女の事に就ては極めて精

(新 魔術 話)

ろしい話がある。彼女はバイカスの王の宮殿から程遠くない大理石造りの宮殿に住んでゐた。彼女と侍女とは暇さへあれば魔術を使ふのに用ゐる毒草を探しにこの森の中を徘徊してゐた。

一日、バイカス王が森を狩してゐる最中にサアーシーと二三の侍女が樾の樹の直ち並んでゐる間でその根が熱しい劇薬となる植物を捜してゐるうちに王と護衛兵とが目についたので樹の間に身を潜めてゐた。

王は不圖野猪が叢の間に走り込んだのが見えたやうに思つた。その場所は荆棘や灌木や小刺のある蔓が生ひ茂つてゐて王は乗馬のままでは一步も進むことが出来ないで徒歩で野猪を逐ふ積にて馬を下りた。王はその野猪がサアーシーの魔術で王の目に見えさせた幻影であつたのに氣が附かなかつた。

サアーシー自身はその叢の中に居て王の踏み迷つてゐるうちに王の身に魔法杖を觸れ、王を小さな紫色の啄木鳥に變へて冠が冠毛になり黄金の扣子が頸を繞

(新 魔術 話)

れる黄色の環になつた。

パイカス王が戻つて来ないので護衛兵は方々へ乗り廻つて王を捜してゐるうちにサアトシーの姿が見えた。護衛兵はこれまでサアトシーが犯した悪事の數々を知つてゐるので王の跡形が見えなくなつたのも彼女の仕業であらうと懸念した。護衛兵はその場に投槍で彼女を殺さうとすると俄に空は揺盪つて物の文目も分らずになつて強い風が吹き起つて樾の大木の枝がきしきしと軋み聲を發した。その折間に附け入りサアトシーは次ぎ次ぎ護衛兵に魔法杖を觸れたこの勇敢なる青年等を種々の野獸に變へた。かくて遠く故郷を離れ朋友に別れて叢の許に眠り草の根や木の實を食んで森の中に住まねばならぬこととなつた。小さな紫の啄木鳥はこの野獸等の頭の上でゴツゴツ樹を敲いたが實はこの鳥がパイカス王であつたとは野獸等も知らなかつた。

(希臘神話)

その二。サアトシーの宮殿を訪へる

ユーリツツシーズ王。

パイカス王とその護衛兵とが樾の森にで斯んな悲惨い目に遭つた後間もなくサアトシーの宮殿に近い港に一ツの船が着いた。この船の中にはユーリツツシーズ王と其従者等が乗つてゐた。彼等は風の袋について失敗して以來幾度か怖ろしい災難に出遭つて人數が減つてゐた。彼等は瀕邊に船を曳きあげて邊りの樹蔭に臥して眠つた。炎天に曝されて烈しく船を漕いだので疲れたからである。氣に入つた場所であつたのでそこに二日の間も逗留した。

三日目に食料が盡きて了つた。乗組のものは苦情を言つてユウリツツシーズ王を咎め初めた。自分達が風の袋に手出しさへしなかつたら長い前に無事に家に歸れたのはよく知つてはゐたが。

(希臘神話)

何か獲物でもしやうとならばもつと内地へ遁入らなければならんことは分つてゐたが何んな危険があるか分らなかつたので誰も思ひ切つて船を離れて遠く内地に行く氣がなかつた。

乗組の者は誰れも行く氣にならなかつたので到頭ユーリツシーズ王は自から獵槍を取つて獨で出掛けた。王の跡形が樹の影に隠れた時は當然の事だと乗組のものは互に私語いた。島を探るの危険には王自から當るがよい、吾々は船を漕ぐので氣力が盡き果てたではない歟と言つた。

王は全島を見渡せるやうな高い所に登つたら島の中央にある草木の生ひ茂つた林の中から黒い烟の細い柱が立ち上つてゐるのが見えた。これは人家のある處で彼所へ行つたなら我が一行が接待を受けられやうも知れぬと思つた。王は急にこの報知を齎らして船へ立ち戻つた。途中で首尾よく一頭の肥えた鹿を殺したのでそれで自分や乗組の者のために立派な晩餐を調へた。従者等はここに初めて自分等の首長は悪

い首長ではないと思つた。

晩餐の終つた頃ユーリツシーズは烟の上るのが見えたことを話した。一行を二組に分け各組に一人の指揮者を置くこと、次に籤を抽くこと籤に當つたものが彼の烟の見た所を取り調べに行くことの約束が出来た。

さて王は人数を算へて總勢四十四人を二つに分け一組の二十二人の指揮者をユーリロカスと定め他の二十二人は王自から指揮した。次ぎに王とユーリロカスとが二個の小石を青銅の甕に入れて振つた。ユーリロカスの石が先づ甕から落ちた。かく籤で極つた通りユーリロカスは固より行くことを欲したが配下のもの共は自分の組が無惨な扱を受けたものと思つて未練にも船の近くに居残り今一度肥えた鹿を王に持ち歸つて貰ふのを待つた方が好いと愚痴を零した。

が翌朝早くユーリロカスと配下の二十二人が林に行き着いて見ると林の中程に空地があつてその空地に美しい宮殿があつた。白い大理石で建ててあつてしかも立派

に磨いてあるので旭に映じてダイヤモンドのやうに輝いてゐた。

一行が宮殿に近いから獅子や豹や熊や狼など幾百の野獸が方々から躍り出でて近寄つて来た。一行は今にも裂き殺されやうと思つたに豈圖らん斯んな殺伐な生物が奈何にも馴々しく傍に寄つて来た。獅子が親しげに身を摩り寄せ狼が飼犬のやうに尾を掉つた。これにて皆々勇氣を恢復して大膽にも宮殿の玄關へ進んだ。その時織機の音と婦人の唱歌の聲が聞えたが自分達の家で聞くことのある音と別段變つたこともなかつたので彌心丈夫になつて聲高に呼ばはつて玄關におとなふ者のゐることを宮殿の内の人に知らせた。

直と美しい金髪の婦人が大きな扉を廣く開いて内に入るやうに案内した。ユーリロカスは何か陥穽でも設けてありはせぬかと危ぶんで外に立ち留まつてゐたが他の者は皆宮殿に進入つて行つた。

二十二人の一行はいづれも今は何んの懸念もなくこれまで見たことのないやうな

(希臘神話)

(希臘神話)

美しい部屋に導かれた。壁には極めて華美な色の花毛氈が掛つてゐた。臥床や椅子には非常に精巧な刺繡が被せてあつた。何一ツとして贅澤の限りを盡さないものになかつた。斯んな偶然に來た旅人等が名譽の來賓のやうに接待された。一行は縫箱のしてある椅子に就くやうに案内され四人の奇麗な侍女が酒を侷めた。酒には何も言へない香氣があつた、がこれから追々出て來るものに較べては酒の香氣の好い位は何んでもないと思つた。なせといふに折々臺所から好い香氣がしてくるのを見ればまだまだ珍味の料理が出來てくるに違ひないからである。いづれも彼等の口に適つた料理であつた。これに勝つた美食はなかつた。今となつては彼等に蠶の落ちたのを歎くどころではなかつた。酒を飲みながら互に軽く臂を衝き合つてユーリツシーズ初め鏡に當らなかつた乗組員の不仕合せに引き替え自分等の満足を思ひ較べて嬉笑し始めた。

その時金髪の美女の愛嬌ある笑顔が俄に怒氣を帯びた般若顔に變つて手に持つて

れた長い杖で客人を片端から鋭く打つた。彼等は話をしやうと思へど唯呼々と叫ぶばかりであつて忽ち二十一人の仲間が皆輝つた小さな目と白い荒毛と捲き縮んだ尾のある豚に變つてゐた。彼等は縫箱のしてある椅子から跳び下りて精一杯叫びながら逃げ出さうと足掻いて器具を蹴倒したりして部屋を走せ廻つた、がサーシーは確と引き留めて遁さなかつた。杖で豚舎に逐ひ込んで置いて傲慢な様子で橡實を幾握か投げ與へた。

ユーリロカスは長い間戸外で待つてゐた。到頭配下のものは皆戻つて來なかつたので船に歸つてその由をユーリツシーズに告げた。ユーリツシーズは直に劍と弓矢とを取つて事態を糺さんと單獨で宮殿へ向け出發した。櫛の林を通り掛つた折に翼のある帽子を被つたマアキユリーに邂逅つた。マアキユリーはサーシーとその魔術の事に付いては何事もよく知つてゐるのでここに邂逅つたのはユーリツシーズに取つては眞に好都合であつた。

(希臘神話)

(希臘神話)

「こんな森の中を一人で何所へ行くのです」とマアキユリーが言つた。

「従者どもを捜しに彼所の空地にある宮殿に参ります」とユーリツシーズが答へた。

「それはサーシーの宮殿だ、汝の捜してゐる者等はサーシーの豚舎に入れられて橡實を食べてゐる」とマアキユリーが言つた。「それは彼等のために丁度宜い場所ではないか、彼等はこれまで随分汝に迷惑をかけたものだ。彼等を其所に取り残したままで汝は故郷へ歸つたが宜いではないか」とマアキユリーが言ひ添へた。

ユーリツシーズは従者共に過失のあるのは知つてゐたが斯んな運命に打ち任せて去るに忍びなかつたので「否、宮殿に遣はしたは私でありました、私は彼等を救ふか難を共にするか致す覺悟であります」と言つた。

「さて、いこらに一種の花がある筈だこの花の力にはサーシーの魔術も及ばない」とマアキユリーが言つて樹々の下に立つて邊に眼を配つた。丁度その折奇麗な紫の啄木鳥が飛び過ぎて櫛の樹の幹をコトコト敲いて孔を穿けてゐた。この樹の

下でマアキユリーは入用の花を見つけた。黒い根のある眞白な花であつた。マアキユリーはそれを摘み取つてユーリツシーズに手渡しした。

「この花をお持ちなさい、失さないやうに氣をおつけなさい、汝がこれを持つてゐる間はサアシーも汝に害を加へることが出来ない、這入らうと思つたら彼女の宮殿に這入つても宜い、彼女は劇薬を入れた酒を備へるであらうお飲みなさい、汝を害することは出来ない、彼女が杖で汝を打つたら汝の劔で彼女を撃ち返せ、彼女は魔術の利かないのを見て懼れるであらう。その折彼女に迫つて汝の従者どもを人間の姿に恢復することが出来やう」とマアキユリーが言つた。

マアキユリーが斯く言つた時小さな紫の啄木鳥が樾の樹から高く叫んで鼓翼して下りて來たのでマアキユリーがこの啄木鳥は實はバイカス王であつてサアシーの魔術で華美な羽根のある鳥になつてはゐるが再び元の王に變はる價值があるのだとユーリツシーズに語つた又サアシーの門を守つてゐる獅子や狼やその他の野獸

(巻之三)

(巻之三)

も元は人間であつたのをサアシーがバイカス王のやうに姿を變へさせたものだともアキユリーが言つた。

マアキユリーは必要なことだけユーリツシーズに告げたので今はオリムパスに歸つた。然るにユーリツシーズは白い花を手にして森の中を歩いて行つて間もなくサアシーの宮殿に到着した。奇怪な野獸が躍り出て馴々しく彼に媚を呈した。

彼は宮殿の玄關に立つて聲高く呼ばはつたサアシーは扉を廣く開いた。彼女はユーリツシーズを立派な座敷に通して銀の椅子に就かせた。彼の王であることを知つたからである。彼女はこつそりと魔劑を入れて王に飲ませるために酒を黄金の杯に調合した。

ユーリツシーズは白い花の力に信賴つて捧はすその酒を飲んだ。次にサアシーは杖で烈しく彼を打つた、がユーリツシーズは動物の姿に變るところか前にも増して王の威光を保ち儼然と突立つて劔で彼女を打ち返した。

サアシーは両手を縮め跪いて容赦を乞ふた。ユーリツシーズ王は自分の従者共
やその他所望のもの多数を元の人間の姿に復させる約束をした。

それより王は彼女と共に豚舎に行つた。彼女は時々と押合ひながら叫んでゐる二
十一頭の豚に或る植物の汁を振り撒いたと思ふとユーリツシーズの従者共がサアシ
ーの宮殿に遁入つた以前の姿でそこに立ち並んでゐた。

従者等は又元の人間となつて世に出ることの出来るので有頂天になつて悦んだ。
斯んな奇怪な経験をしたのも畢竟自分達が強が氣儘な振舞をしたからであると氣が
付いたのでその日からは自分達の安逸や快樂と他人の利益とどちらかその一を撰ま
ねばならんやうな事が起るとこれまで道つて来たよりはもつと賢い撰え方をするや
うになつた。

小さな紫の啄木鳥が忽ちユーリツシーズ王の頭の周りに鼓翼して来たので王は
サアシーに彼の植物の汁をその鳥にも振り撒かせたすると立派なバイカス王が元の

(希臘神話)

通り紫の袍を着て前に立つてゐた。續いてバイカス王の元の護衛兵が人間の形に
復つた。又サアキーの宮殿の周圍にゐた野獸の中でその恩恵に價打ちするものだけ
は人間に立ち返つた。が無惨な虎や狼の幾分はその儘見捨てられてその殺伐な性
質に似合つた姿で咆えたり唸つたりしてゐた。

(希臘神話)

◎アリオンと海豚

アリオンは稀代の詩人であつて日頃自作の詩を琴に合せて歌つてゐた。彼が住居
は小亞細亞の海岸を遠く離れたレズボス島にあつた。されど國々を遍歴して宮廷で
詩を歌つてゐたので自分の家に居ることは稀であつた。

その時分には自作の詩を歌ふ詩人は随分多かつたが誰れ一人アリオンと肩を並べ
るものはなかつた。

アリオンがコリンスの宮延で歌つた折に王の獵犬が廷臣同様に悦んで音楽を聴きに飛び出して来るのが常であつた。夕方涼しい風を納れんため扉を開いたままで歌ふ折などには猛き狼が闇の中を山から幾頭も下りて来て王宮の周圍に集まり美妙な琴の音に聞き惚れてゐることが間々あつた。戶外に狼の眼が輝つてゐるのが見えても音楽が止んだと思ふと早や跡形も見えなくなつてゐる。頭の上には大きな鼻が鼓翼して暗い樹影に來た此外にも廷臣等に氣の附かなかつた聴き手がまだあつた。

音楽競技會がシシリにて催され賞品には黄金の財囊が出るとの報知が一日コリンスに達した。希臘の詩人は擧つて出席する筈になつた——勿論黄金を得やうといふのではない名譽を得んどの望であつた。

アリオンは黄金にも名譽にも眼を眩れなかつた。唯何よりも歌ふことを愛した珍しい國々を見物することを好んだ。それで彼も亦行かうと言つた。が競技が濟ん

(希臘神話)

だらコリンスに歸らうと約した。

シシリ王や裁判官等はアリオンの抜群の奏樂を聴いて驚歎し、些の異議もなく賞品を與へた。王以下の人々はアリオンを長くシシリに引き留めたいのであつたがアリオンはコリンス王に約したこともあるので、コリンス市に歸航する船に乗込んだ。

アリオンが賞品を携へコリンスに出帆した日ほど快晴で海の穩かな日はなかつた。早やシシリは見えなくなつて唯僅にその山々ばかり微かに姿をとどめてゐた。アリオンは最後の峯の消え行くのを見詰めてゐた折しも不圖武装した水夫どもが身邊を取捲いてゐるのに氣が附いた。こは賞品の黄金を奪はんがため水夫等が徒黨したものと彼は早くも合點した。船長が抜劍を掲げ詰め寄つて「汝が所持の金囊を我に與へ、よして死の覺悟せよ」と言つた。

「黄金を與へても余を生かして置かぬとな」とアリオンが言つた。

(希臘神話)

「否、汝は死なねばならぬぞよ」と残忍に船長が答へた。アリオンを生かしておいたならコリンス王に悪事を見られるのを船長は恐れたからである。

「余は死を恐れるものではない、只余が琴に最後の歌を詠ふことを許せ」とアリオンが言った。

「ぞは汝が爲すに任せん、が歌ひ了らば汝はその身を海に投げねばならぬぞよ」と船長が言った。

やがて船長と水夫等はさしも評判の詩人の歌を聴くのを欲しないので船の中央に退いた。然るにアリオンは朝服を着て船尾に立ち悲しげにシシリーの美しい島の方を眺めながら最後の歌を詠った。

歌者の聲が水面を漂ふた。丁度その折傍に泳いでゐた一群の海豚がその聲を聴いて船を追ふて跳んで来た。

アリオンは歌を詠ひ終つて尙琴を手にしてまともに海に跳び込んだ。水夫等は楫

に跳び附いて精一杯疾く漕ぎ出して斯んな悪事を働いた所を一刻も早く遁げ去らうと焦心つた。音楽を聴かんと出浮いてゐた賢い老海豚がアリオンの船尾から跳んだのを見てこの音楽家をその背に受けた。それより海豚はアリオンを背にしてコリンスへ泳ぎつかんと出で立つた。

アリオンはこの賢い海豚の背に乗りながら琴を弾いてゐると他の海豚等はその後續いて泳いだ、波も琴の音に聴き流れて静つた。でこの行列が無事にコリンスに着いた。

コリンスの王は大に驚いてアリオンが王に物語つた始末を信ずることが出来なかつた。悪しき水夫等が着するや否や召し出してアリオンの身の上を問ふた。

「彼は至つて壯健で好運で御座りますが此の度は以太利に滞在の心組で居りまして御座います」と水夫等が言上した。

王はやがてアリオンを召し出せしに海に跳び込んだ折に着てゐたのと同じ朝服を

着て王の御前に出た。水夫等は不意を打たれて逐一白状したので王は彼等を國外へ追放つたがアリオンは希臘中で一番豪い勇士であつた。

◎サイキー

その一。愛の神イーロスの宮殿

或る王に三人の王女があつた。美姫であるといふ評判が廣く世に傳つた。中で一番美しいのが末女のサイキーであつた、この王女がお寺に参詣でもすると大抵の人が彼女をヅキーナスと取り違へて愛と美とのこの女神にと齋らした花環をサイキーに捧げた。

眞のヅキーナスはこれがため酷う不機嫌で別に非難するほどでもない憐れなサイキーに怨を晴らさうと決心して一日愛の神イーロスに命じて黄金の鍔のついた矢の

(希臘神話)

(希臘神話)

一ツでサイキーを傷つけ極めて賤しい乞食を戀慕させやうとした。

イーロスは矢を取て母の命令を執り行なはんと地上に降りて來た。彼はサイキーを二目見ると忽ち彼女の稀有の美に驚いて自分の矢で自分を傷けた。斯くてサイキーを乞食に戀慕させることはさて置いてイーロス自身がサイキーを戀慕した。

これより先きに二人の姉は王女の身分に相應した王子等に結婚したがサイキーは姉にも増して一際美しいにも拘らず一人の戀人の、年若い妹に結婚を求めて來るものがなかつた。こはヅキーナスの怒を招いたためであらうとの疑念を懷いて王は如何したもの歟と豫言者に謀つた。豫言者の言葉は次のやうであつた。

汝が姫を新婦のごと扮装させ

山懐に引き連れよ

その山懐に翼あるえ知らぬ敵が

下に住むあらゆる者の怖るる敵が

上に座す神々さへも恐るる敵が

鷹の鳩を求むるがごとく彼女を求めなん

王は悲歎の涙にかき暮れたが敢て背きもえせなかつた。それで一夜サイキーの侍女等が彼女に婚禮の衣裳を着せ父の臣下の長い行列が護送して高い山の巔なる岩が根に彼女を据えて悲しげに火把を消し暗闇の裡に唯一人彼女を殘して去つた。

人の足音もせなくなつた後サイキーは泣きつ戦慄へつ坐しながら龍の翼を羽撃つ音が聞えてその爪その齒に掛るは今か今かと怖ら恐れてゐたに何を圖らん彼女の身に觸れたのはゼフキラス(西風の義)の颯颯と吹く冷しい氣息と溫柔な翼とであつてそのゼフキラスが靜に彼女を岩が根から起してやがて兩頬に空氣を含んで打ち脹らし彼女を美しい緑の谷に吹きおろし堇菜の花の咲き匂ふ堤の上に靜に据えた。

この溪谷の月の光に照された景色の奈何にも秀麗で平和であつたのでサイキーは恐怖の念を打ち忘れて寝入つて了つた。朝になつて目が覺めたら高く聳えた木立の

(新編神話)

(新編神話)

美しい林があつてその林の中には目を驚かすべき宮殿が見えその宮殿の前には泉があつて水を噴きあげてゐた。屋根の大楯形は黄金の柱で支えられ壁は一面に銀の彫刻物で飾られ牀はあらゆる色彩の寶石で出来た剪儀細工であつた。

サイキーはこはく玄關に這入つて廣々とした部屋々々を彷徨いたが一部屋は一部屋より壯麗であつた。目には見えないが仙女が互に語り合つてゐるやうな低い聲が聞えるやうに思ふことが一二度あつた。が聲であるのか泉の水の滴る音であるのか分明とは分らなかつた。

やがてサイキーは一つの部屋の扉を明けた内には一臺の卓子が据えてあつて饗應の用意がしてあつた。椅子も一脚膳部も一人前しかないのを見れば待ち設けの客人は唯一人らしいやうであつた。彼女はこはくながら椅子に着くと王宮の仙女等が來て給仕をしたが仙女等の姿は一人も見られなかつた。彼女は饗膳の言ひ知らぬ風味を愛でた。仕舞の皿が目に見えない手で下げられた後は音楽が彼女の耳に入つて

来た初に一齊の唱歌が聞え次に琴に合せた獨吟が聞えたが、演奏者の姿は見えなかつた。

日が落ちて夜に入つたらサイキーは戦慄へ始めた。王宮の持主が豫言者の言つた翼のある怪物であつて彼女を要求に来はせまいかと恐れたからである。この王宮には錠もなければ栓もなく戸や窓は明け放しであつて盜賊やその他悪漢といつてはいつも居なかつたもののやうであつた。

自分の手が見えないほど真闇になつた折サイキーの耳に翼の羽音が聞えやがて何か大廣間に下りて来る足音が聞えたその足音が軽く速く彼女が坐つてゐた低い臺に來てやがて耳觸りの好い音樂的の聲で彼女に言つた——「美しいサイキーよこの宮殿も中にある物も皆汝のものよ汝が茲に住まつて私の妻となるなら、汝の聞いた聲は汝の侍女の聲であるその侍女は汝の言ひ附けとあれば何なりと背きはすまじ。夜毎に私はここに來て汝と時を移すであらう。が夜の明ける前に私は去らねばならぬ

(添 翼 神 話)

私の顔が見たいとか私の素姓が知りたいなど言つてはならぬぞや。何も私に頼るがよい。私の希ひは是れだけぞや。

この言葉を聞いたサイキーは直に取つて喰はれる心配は幾分薄らいだが、それでも若しや此の聲が怪物の聲ではないかと危ぶんだ。

この奇怪な戀人は果して毎夜極つて彼女の許へ話しに來た。彼が來るのを彼女は楽しんで待ち受けることもあれば翼の音に恐れをのくこともあつた。

ある日サイキーはゼンキラスに溪谷へ吹き下ろされたことあつた岩の見える邊で薔薇の花を摘んでゐるうちに此の岩の上で二人の姉妹が死んだ人を悼んでゐるかのやうに胸を打つて泣き叫んでゐるのを見た。

自分の名をいふのが聞ゆるのでサイキーはこは自分が此の岩の上で喰はれて了つたのだと思つて二人の姉が自分の死を悼んでゐるのに違ひあるまいと思つた。サイキーの姉達は日頃彼女に親切ではなかつたがその實矢張り自分を愛してゐたものと

(添 翼 神 話)

今は信じた。

その夜戀人が闇の裡に來た折にサイキーは自分の姉達に會つて自分の存生して幸福に甘を送つてゐることを知らせたいと言つて頼んだのでイーロスはいやいやながらも承諾した。

翌日も亦二人の姉が例の高い岩へ來たところがゼフキラスが以前にサイキーを吹き下ろしたやうに姉達をも溪谷へ吹き下ろした。ここに初めて妹の身の上の幸運なのを見て姉達は甚う驚いた。がそれを悦ぶかと思の外却つて妹を嫉んだ。姉達は妹に何や彼やと様子を聞き糺し分けて宮殿の持主について不審を懷いた。サイキーは姉達は宮殿の主人は山々に狩に出て留守だと言つた。その折ゼフキラスは姉達が餘りにうるさく穿鑿だてをすると看たので彼等を元の岩へ掃ひ戻したので訪問はそれで終つた。

暫するとサイキーはいつまでも一人で居るのが退屈になつて又姉達に會ひたい

(希臘神話)

と思つた。彼女の戀人が再び承諾を與へはしたが自分の事に就いて何か尋ねても一切返答をするなを聞きさへするなと戒めた。若しサイキーが面と對つて戀人に會はふとしたなら戀人は餘儀なく彼女を見棄てて飛び去らねばならない随つてこの宮殿も亦消えて跡形もなくなるであらうと念を押した。

翌日ゼフキラスが前のやうに姉達を溪谷へ連れて來た。この嫉妬深い婦人等が妹の幸運のことに付いて思案を運らし二人の心中に悪い考が満ち満ちてサイキーの幸福を打壞る積りでここに一つの計畫を立てた。宮殿の持主は必定極めて怖ろしい翼のある蛇で豫言者のいつた通り名の付かぬ怪物に相違ない現に山の上に住んでる者が毎夕その怪物が溪谷へ下りて行くのを見たといつて居ると姉達が妹に語つた。「彼は親切らしう見えてもお前を喰ふ機會のあるのを待つて居るまでのことだわ、お前があのもので凄惨な鱗をこはがるもんで面と會はふと言はないんだわ姉さん達の言ふことをまあお聞きよ龜の甲より年の効だもの、此の匕首をあげるからお前め似而非

(希臘神話)

旦那が眠つてるまに燈に火を點けてその姿を見てご覧、姉さん達のいふことが本當だつたら怪物の首を打ち落してお前は無惨の死を免れたがよい」と姉達が言つた。

斯く言ひ終つて姉達はサイキーに匕首を渡したままで急ぎその場を去つた。跡に残つた憐れなサイキーは姉達の言葉に怖氣がついて恐くて堪らなくなつた彼女の信賴は失せて心に曲つたことがないのなら何故あんなに暗闇の裡に隠れたがるのだらう、何故姉達の訪問ふのを恐れるのだらう、何故彼には翼があるのだらう、思ひ出しても身震ひが出るのは大理石の牀の上を蛇の滑つて行く様な音が一二度彼女の耳に入つたことであつた。

間もなく日が暮れた。彼女の戀人が来るのが聞えた。その夜彼の女は對話もしなかつたので戀人は寢臺のある部屋に行つて寢入つて了つた。

やがてサイキーは恐くて震ひながらも燈に火を點け匕首を持つて彼の寢てゐる

(希臘神話)

(希臘神話)

寢臺へ忍び入つた。燈の光はまともに彼の顔に落ちた。さてサイキーの目に見えたのは鱗のある蛇ではなくて神々の中でも一番美しいイーロスであつた愛の神自身であつた。金髪は顔から背後に垂れてゐた。眠つてゐるので雪のやうに眞白な翼は折り重つてゐたが蝶の翅の毳毛ほを細い翼の上の毳毛が寢息につれて微かに攪亂れてゐた。足もとには弓矢が横たはつてゐた。

萬一誤つて手を下したなら………と我と我が所作が恐ろしくなつてサイキーは匕首を落した。その折珍らしげな矢を一本拾ひあげて黄金の鏃で自分の指頭をそと衝いた。頭の上に燈をさし上げて彼女は再び振り向いてイーロスを見た。今は初めて愛の神を戀ふる情に嬉しさの餘り恍惚と見蕩れてゐた、が彼女の手が震へた一滴の熱い油が神の肩に落ちた。イーロスは眼を見開き彼女を睨付けて無言のまま飛び去つた。美しい宮殿も消え失せてサイキーは只獨り淋しげに取り残されてゐた。

その二。サイキーの審判。

サイキーはそれより見失つたイーロスの長い搜索をし初めた。パンにもシーリーズにもジュートノーにも次ぎ次ぎ出會つたが誰れも彼女を助けて遣ることが出来なかつた。愛の神の母はその子のため自分に親切であらうと思つたので彼女は到頭ヅキーナスの許へ行つた。

イーロスは此の時焼け油のために受けた火傷を煩つてヅキーナスの宮殿に臥してゐた。ヅキーナスはありし事の次第を知つてゐた。鷗が飛んで来て女神に告げたらである。女神は怒つて罰として殆んど人力には出来難い仕事を命じた。

先づ女神は堆いほどある種物に指した。種物は小麦や大麦や粟やその外幾種類もあつて皆播き雑せたものでこれは女神の車を挽く鳩の群や女神の旅行のお伴をする雀の群の飼料であつた。「これを持つておいで一粒撰りに種類別けをするのだよ。」

(希臘神話)

そして日の暮れぬ内に仕事を了ふのです」と女神がいつた。

可愛さうにサイキーは仕事を始める勇氣もなく頭を垂れ腕を拱いて坐つてゐた。偶一ツの蟻が石の下から走り出て蟻群の總勢を慕つたので蟻は愛の神のために集つて来て忽ち種類別けをして種物を撰り分けた。

ヅキーナスは日暮に遣つて来てサイキーの仕事が出来てゐたのを見て甚う驚いた。憐れな娘に一片の麵包を投げ與へて明朝はもつと難儀な仕事をさせやうと言つた。で翌朝になつたらヅキーナスが幅の廣い河の岸にサイキーを連れていつて金毛の羊の群が草を喰つてゐる向ふ岸の森を指してあの金羊毛を少し取つておいで」と言つた。

サイキーは直にも河に足を突込まうとしてゐると岸邊の葦が彼女に耳語いて「今あの羊に近寄つては不可ません、日の高いうちは猛烈な生物です、川流の歌ふ水音が羊を驚かすまでお待ちなさい、寐籠つたら行つてお好み次第に金毛を灌木の藪

(希臘神話)

か勝つたかぎよらす敷金にしまふ毛探をに絡めつけた儘にしてゐますから」といつた。それでサイキーは日が低くなるまで待つた上で河を渡り金羊毛を一抱も待つて歸つた。

サイキーが無事に戻つたのを見てヅキーナスは一層腹を立てた「お前は自分でしたのではない、さあお前がイーロスの花娶になるほど賢くて慎みがあるかどうか試して見やう、この水晶の水注子を持つていつて「健忘の泉」から水を一杯汲取つてお出で」と女神が言つた。

この泉はある高山の絶頂にあつた。氷のやうに冷たい水が誰にも届かないほど高く滑な岩から迸り出で狭い水路を突いて奔流するとき「そこ退いた！用心！死にますぞー」と言つた。どす黒い河流のどちら側にも洞があつてその洞には猛烈な龍が住んでゐた。サイキーはその場所に来てこの有様を見たら恐くなつて動くことも物言ふことも出来なくなつた。それでも彼女はこの仕事をも成し果せた。愛の

(希臘神話)

神イーロスが手懐けてゐたジューピターの鷲が水晶の水注子を啣へて行つて彼女のために泉の水を汲み取つたからである。

サイキーは此度こそヅキーナスの満足を得やうと思つて水を齎らし女神の下に走せつけた、がヅキーナスは未だ不機嫌でゐた「お前は魔法を使ふ女だ、さもなくば斯んな事が出来やう筈がない、が茲にまだ一ツ仕事がある。この匣を下界に携へて行つてプロサアーバインに頼んで彼女が美の幾分を余がために持ち歸つては呉れまいか」と女神が言つた。

サイキーはこれ聞いてヅキーナスは必定自分を亡きものにする積りだと思つたので、女神の迫害に張り合つて争ふのは無益だと思つて彼女は高い塔の梯段を登つて塔の頂から身を投げる覺悟をしたが、塔の石材が彼女に聲をかけて「お聞きなさいサイキー嬢！彼所の荆棘で塞がつてゐる暗い空隙から下界に降れる路が通つてゐますの両手に一片の麵包を握り口に二文の錢を啣へた上でこの凸凹な路に隨

(希臘神話)

てお出でなさい。死出の川に來ると船頭のターロンが貴女から一文の錢を貰つて川を渡すでせう。プルーエーター王の宮殿の門にお着きになると番犬のサアベラスが門を守つてゐますが、一片の麵包をその猛烈な犬にお遣りになると貴女を通しますでせう。するとプロサアバイン女王のゐる宮殿に這入れます、女王は自身の美の一部を匣の中に入れて貴女に渡されますから貴女はもと來た路を通つて歸へられます歸りがけには残つた麵包をサアベラスに残つた錢をカーロンに遣るんです、もう一ツ貴女に申して置きますが決して匣の中を覗いては不可ません」と言つた。

サイキーは此の忠告を難有く受けて一々守つたが但一ツ背いたのは匣を覗くなどいふ注意を歸りがけに忘れたことである。愛の神に通げ去られてから酷く煩悶したのでサイキーの美は殆んど失せた。それでプロサアバインの美を少しばかり自分のに貰つても悪くはないと思つて匣の蓋を揚げたフット一陣の氣が洩れた。目に見えない奇異な物が匣を突いて出で彼女を壓した。彼女は氣が遠くなつて寐入つて

(希臘神話)

(希臘神話)

了つた。若し愛の神の傷が癒えて通りがかりに彼女に遇はなかつたならそれなり目を見さなかつたかも知れなかつた愛の神が彼女を揺り起したので再び目が覺めた。やがて匣と共に彼女を母の許に送りつけてアイーロスは直にオタムパス山に飛んで行つてこの事件をジューピターに訴へた。

神々の王たるジューピターは一應アイーロスの陳述を聞いた上にてサイキーは不死のものとなりアイーロスの新婦となるべしと宣ふた。

直とマアキエリが使に立つてサイキーをオリムパス山に連れ來り神々は皆寄り集つて祝宴を開いた。ジューピターは手づからこの乙女に神聖な神酒の杯を賜つた。神酒を飲んだものは誰れでも永遠に生きながらへるのである。サイキーは黄金の杯から神酒を飲んだと思ふと直に美しい蝶の様な雙の翼が肩から生えて全然神の姿になつた。

新妻サイキーは愛でたくアイーロスと結婚した。アポロは祝の歌を歌つたグキー

ナスは前の不興を打ち忘れて婚禮の席で舞踏つた。

◎オーデンと智慧の泉

宇宙に日もなく月もなく星もなければ世界といふものもまだなかつた原始に巨人族がゐた。巨人族は曾て空気を呼吸したものの途中で一番古い生物であつた。彼等は霜と開の土地なるシヨタンハイムに住んでゐた。彼等の性根は悪かつた。次に現はれたのは善良なるネトサド族即ち神族であつてこの神族が地球や空や海を作つたのを夫上のガスガアドといつた都に住まうさむた。次に現はれたのが保備族であつた。山々の洞穴に住んで金属や寶石を掘出すのを仕事としてゐた。最終に神々が人間を作つて吾等の現に知つてゐるこの善き世界のミッドガアドに住まはせた。

(審判神話)

ツドガアドと神族の榮光ある國との間にバイスロースといつた虹の橋が架つてゐた。

(審判神話)

その時分にイグドラシルといつた秦皮の大樹があつてその枝が地球の全部を蔽ふて神族の住んでゐた天に伸び横がつて根は深く地の奥底に沈んでゐた。枝の中には稀代な生物類が棲んでゐた。先づ第一に大鷲がゐた。その鷲はこれまでに類のない賢い鳥であつた——但しノット(思想)とメモリー(記憶)といつた二羽の鳥は例外である。この鷲はオーデンの肩に止つてその廣い世界を翔け廻つて見聞させた秘密をオーデンに知らせた。その大鷲の傍には一羽の鷹が止つてゐた。イグドラシルの芽の中には四本の角の鹿が嫩芽を咬んでゐた。樹の下には大きな蛇がとぐる巻いてゐた。小さな蛇は數へきれぬほど澤山ゐた。樹の頂にゐる鷲とその下にゐる蛇とは敵であつていつも互に難題を云ひかけてゐた。鷲と蛇との間には小さな栗鼠が跳び上つたを飛び下りたりして話の傳達を勤め根性の隣い隣人のやうに喧嘩の花を咲かさせ

てゐた。

イグドラシルの根の邊にアルダー泉といつた清らかな泉があつた。その泉の所に過去現在未來の事を知つてゐる三人の乙女が二羽の白鳥を愛養しながら住んでゐた。この泉の水は魔の水であつてそれを三人の乙女が毎日この大樹に振りかけて樹の縁を鮮やかにしてゐた——この水に這入つたものは何んでも皆卵の殻の薄膜のやうに白くなる靈水であつた。この靈泉の傍にイーサア族の議事堂があつてこの議事堂へ神々が毎朝虹の橋を渡つて走せ寄つた。

が、神族の王たる大父オーデンは外にもつと思議な泉のあるのを知つてゐた。新奇なことを探らせに出した三羽の鴉がオーデンに告げたからである。これも又イグドラシルの根の下で空と海とが一ツに會ふ所にあつた。ここに幾百年といふとなや巨人のマイマアアがこの秘密の泉を守つてゐた。この泉の底には世界の何所にも見られない智慧の寶が潜んでゐた。毎朝マイマアアが目映く輝る觴を泉に漬けて靈

(希臘神話)

水を汲取りこれを飲んで賢くなつた。毎日飲めば飲むほど賢くなつた。してこれが原始以來續いてゐたのだからそれほどマイマアアが賢かつたものか想像にも乗らぬほどであつた。

(希臘神話)

さて巨人族の一人にこんな智慧を専有させておくのは宜くないとオーデンが思つた。巨人族は神族の敵であつて神族以前數代の間積み來つた智慧は大抵悪い目的に使はれたからである。又オーデンは世界中で一番賢いものにならうと渴望してゐた。それで是非ともマイマアアの泉から一掬の水を得やうと決心した。

夕日がミドガアードの山影に隠れた頃オーデンは緑の廣い帽を被り條文の入つた外套を着て評判の杖を手にしてマイマアアの秘密の洞まで架つてゐる長い橋を濶歩した。

「さてマイマアア君、御身の泉から一掬の水が飲みたうて今日は参じたのでござる」といつてオーデンは這入つて來た。

巨人は膝を腰に押しつけて坐つてゐた。長い白い髯は拱いた腕に垂れたまま坐睡してゐた。マイマアは年老いてゐたのでおのが珍奇の泉を守つてゐる間にも寢入つて了ふことが度々であつた。オーデンに言葉をかけられて顔を覺めながら目を醒した「御身は私の泉の水が飲みたいとな、いやいやこの泉の水は誰にも飲ませることは成り申さぬ」と老人が叫んだ。

「でもあらうが、御身の輝つた觴で一口飲まして貰はう、相當の酬はするとして」とオーデンが言ひ張つた。

「はて酬をするとなと客人を疑と見詰めながらマイマアが答へた。今ははつきり目が醒めたのでその智慧がこの客の凡物でないのを認めたからである「この泉の水を御身に一口飲ますものなら其報は何となさるとな。して何故にさほどこの水が飲みたいとな」

「吾が眼は能く天の事地の事一切を見抜く力はあれど大海の奥底を見徹す力なし、

(希臘神話)

(希臘神話)

我れは大海についての智慧を缺く——御身の泉の底にある明智を缺いてゐる。吾が鳥は我れに多くの秘密を告ぐれど我れはあらゆるものを知らうと思ふ、して酬のことは御身が求むるに任せん何なりと智慧の水の報として御身に預けるであらう」

その折マイマアの鋭い眼つきが彌鋭くなつた。御身は神族のオーデンよな、吾等巨人族は御身等より幾百年となく古うござる吾等が宇宙を獨り舞臺で働いたるの間に積みあげた智慧は貴重のものでござる。今若し御身に吾が泉の水を飲ますものなら御身は賢い危険な敵になるであらう、これは大なる價格でござるかほどの賄物に換へて吾等は大きな價を求めたうござるオーデンよ」と老人が叫んだ。

オーデン今は燦然と閃めく水を見て堪え難うなつて來たので「價は御身の了簡次第だ、素より拂ふ約束のしてござる」といつて眉を擡めた。

「さらば天眼通を具せる御身の片眼を吾が泉の底に棄て置くことは如何に、この外の報酬は一切受け申さぬ」とよもやこの難題には應ずまじと思ひながらマイマア

が答へた。

オーデンは躊躇した。成る程高い價であつた日頃オーデンはおのが氣高い美を意得としてゐたので奈何にも難題であつたが、魔の泉が不思議にブツブツと木蔭に沸き騰つてゐるのを見て是非とも飲まうと覺悟した。

『その輝つた觥を貰はう、我が片眼に換へてこの觥一杯の水を飲まう』とオーデンがいつた。

否否ながらマイマアは觥に智慧の泉の水を汲み取つてオーデンに手渡しした。さあ飲まれい、飲んで賢うなられい、御身の同族と吾が一族との葛藤はこれから始まるであらう』といつた。賢いマイマアは眞理を豫言した。

オーデンは一途に吾ものになるべき智慧のことを思つた。急にその觥を取つて忽ち飲み乾した。その時からはマイマアを除けては世界中誰一人及ぶもののない賢者となつた。今度はその價を拂ふの不愉快を忍ばなければならなかつた。でその

(希臘神話)

(希臘神話)

洞を去る折に泉の底におのが爛々たる片眼を棄てた。その眼は星の光のやうに泉の底を遠して閃めいてゐた。オーデンはかく片目を失ふてその日からは人目を避けやうと思ふ折には白帽子を眼深に被つた獨眼のためにアスガアードの賢い君を皆が餘りに認め易いからである。

翌朝空は晴れ渡つて旭日がミッドガアードの山々の上にさし昇つた頃年老いたるマイマアは泉からオーデンの預けた眼の上を流れて出る靈水を一口飲んだ。さうするとマイマイはこんな洞の中にながら天の内や地の上に起つたあらもることを見通すことが出来た。さればこの取引にてもマイマアの方が賢く立ち廻つたのであつた。オーデンは人情棄て難いものを失つたのに老人は何一つ失ふこともなかつたが、この取引は結局オーデンの利益に天秤が搖り落つることとなるのであつた。

この後間もなく神族はワニア族と争論の未恐ろしい戦があつたが、終に双方和睦

して二度と戦をせなまいといふ證に人質を取換した。ワニア族は神族に海と海風との君たるニオードにその二兒フレードとフライアとを添へて贈つた。これは實に立派な贈物であつた。フライアは世界中で最も美しい乙女で其雙兒の兄弟たるフレートもこれに劣らぬ美少年であつたからである。その酬に大父オーデンは自分の兄弟のヘーニアをワニア族に遣つた。してヘーニアに添へてはあの淋しい泉から連れて來た賢者のマイマアを遣つた。

さてワニア族はヘーニアを族長にした。その智惠のために評判の高くなつたオーデンの兄弟であるので屹と賢いだらうと思つたからである。彼等はマイマアの泉の秘密を知らなかつたのでこの白髮の老巨人があゝの靈水を飲んだことのないものより遙に賢かつたことにも氣がつかなかつた。ワニア族の會議に臨んでヘーニアが卓越の訓示を與へたことは事實である。がこれはマイマアがヘーニアの耳もとでその述べた智惠の言葉を囁いたからであつた。マイマアの居ない折にはヘーニアは

(希臘神話)

(希臘神話)

怖々して何か質問でもされるといつてもさうあつた。まあ外の者に謀つて是れ」といつた。

勿論ワニア族はその族長からこんな淺慮な返事を聞いて酷う憤慨して「オーデンは吾等を欺いた。彼れ阿房者に魔術者を添へて吾等に遣つたのだ。よし、吾等はそゝの手に乗らないことを見せてやらう」といつてマイマアの首を斬つてオーデンへ贈物とした。

◎グラツドシヤイム宮

紀念の城門

昔この世界が始めて出來た頃神々が謀り給ひて天上に高く美しい都を築かうとの評議が極つた。これまでにない壯麗な都を建てようといふのであつた。アスガア

トドといふがその都の名となるのであつてアイダ原のイグドラシルといふ大樹の蔭の下に立つのであつた。

先づ第一に神々は銀の屋根の宮殿を造りその宮殿には十二の主神の座が設けてあつた。中央の一段高い所に大父オーデンの座壇があつてその壇からオーデンは空の内や地の上や海の中についたあらゆる事件を見張ることが出来たのだ。次に神々は大母フリツグとその愛らしい姫等のために華麗な宮殿を造つた。それより鍛冶場を造つた。鍛冶場には大きな鐵槌もあつた。鐵鉗もあつた。鐵砧もあれば風櫃もあつて神々が得意の黄金細工に従事することが出来た。その後神々に閑暇があつたので總てイーサー族のため別々に前にも増して美しい家を造つた。それは言ふまでもなく神々は日増しに工事に熟練して来たからである。が、神々はだ父オーデンの宮殿が一番宏大であり壯麗であると思つたのでこの宮殿を最終まで保存した。

グラツドシヤイム(歡喜の家)といふがオーデンの宮殿の名であつた。この宮殿は

(番 神 話)

全部黄金造であつて林の中央に立つてゐた。

して林の樹々は紅色の金葉で宛然秋の紅葉のやうであつた。大父の身の安全のためには周圍に水音の鳴り響く川が流れ丈の高い杭が建て繞らしてあつた。

グラツドシヤイム宮の榮光は金色燦爛たる大廣間であつた空前の愛すべき室であつた。バルハラ(勇士の間)といふがこの廣間の名であつて勇士等の持つた見事な楯で屋根が葺いてあつた。天井は槍を組合はして出来てゐた。西の端に通用門があつて門の前に大きな灰色の狼が釣り下げてあつた。その狼の上には猛き鷲が翺と翺つてゐた。大廣間は滅法に大きなものでその周圍に五百四十の門があつていづれも八百人の同勢が並んで通れた。この廣間で毎朝オーデンが下なる地球で戦死したあらゆる勇士に接見するのであつたから斯んな大廣間が入用であつた。

これは神々が勇士の面目に對して與へた褒賞であつた。勇士が花々しい戦死を遂げるとオーデンの九人の姫達が白馬を雲間に馳けらしてその勇士の身體をバルハラに

(番 神 話)

携へて來るとここに勇士は長へに幸福に生存し會つて地球で最も愛好したものを愛好することが出來た。ここに斯く寄り集つた勇士等は毎朝武裝して廣やかな中庭に出で互に闘い合ふのであつた。目醒しい勝負が花々しく演ぜられた。この試合で勇士の殺されるものも随分あつたがやがてそれが蘇つて元氣よくバルハラに戻つて來てイーサー族と美食を共にした。最初ここへ勇士を連れて來た美姫等がお給仕に出で天酒を酌んで饗應した。かくて勇士等初めアスガアードに住んでゐたもの等は皆奈何にも幸福な生活を送つてゐた。

しかるに巨人族とイーサー族とは初めから仲が悪るかつた。そは巨人族の方が古株で體體が大きく性根が悪つた上に善良なイーサー族が智慮や威權に於て長足の進歩をなしつつあつたのを嫉んだからのことであつた。人間に光を與へんため美しい兄妹の日と月とを空に据えたのも寶玉を鑲めたやうな星の群を竈の火花から作つたのもイーサー族であつた。巨人族はイーサー族を憎んだので力を極めてイ

イーサー族とその愛顧した下なる地球の人間に危害を加へやうとした。神々は既に人間の世界の周りに胸壁を繞らして巨人の侵入を防いだ。アスガアードの都と巨人族との間にはアイフキンといふ氷の張つたことのない大きな河が流れてゐた。神々は虹の橋を架けてこの河を渡つたが、これ丈では十分の防禦にならなかつたのでアスガードの都に一つの城が入用となつた。

それでアスガアードの都では巨人族を防がため城を築かねばならん、これまでにない堅牢な城壯大な城立派な城を造らねばならんと皆が言つてゐた。斯く評議が極つてから間もなく一日のこと一人の偉大な男がアスガアードの都に架けた虹の橋を渡つて傲然と歩を進めて來た。

「誰れだ！、誰れだ！。そこを通るは！。おれが許さぬものは誰れ一人アスガアードに這入ることは相成らん」と番人のハイムダルが大音に呼ばはつた。ハイムダルの眼力は鋭くて百里四方に届き耳は聴くて牧場の草や羊の背の毛が生える音さへ聴

き分けた。

「私は大工です、堅牢な塔を建てる大工です、聞けばアスガードの都に立派な城が出来るので人手が入るさうな」と袖を巻くしあげて腕の筋肉を見せながらその大男が言った。

ハイムダルは例の鋭い眼力でその大男を凝と見詰め心に落ちぬところがあるので返事もしないで手にしてゐた黄金の喇叭を吹き立てた。その音が奈何にも高くて世界中に鳴り響いた。この相圖でイーサー族は皆虹の橋に走せつけて何者がアスガードに來たものか見届けやうとした。怪しげなものが遣つて來るとこれを都の人に警告するのがハイムダルの役目であつた。

「此奴は大工だと申します、して都の城を築かして呉れと申すんです」とハイムダールが言った。

「ハイさうでござる。この鐵腕を見て貰はう、この幅廣の脊を見て貰はう、この肩

(番 圖 神 話)

を見て貰はうどうです君等が望に叶つた大工ではないでせうか」と大男が領いた。

(番 圖 神 話)

オーデンはこの男を見詰めて嘉納しながら、成程立派な體格だ、汝一人で吾が城を築くにどれ程隙がかからう、都の内には一時に一人しか外來漢を入れられないのだ」と宣ふた。

三年半で奈何な巨人族でも陛下の御許可が出ないうちには一步も足を踏み入ることの叶ひませんほどの堅牢なお城を陛下のために築くでござらう」と外來漢が答を

した。大父オーデンは満足の體で「やあ！。してさう早く間に合はすとあらば如何な褒美を取らさうぞ吾が友」と宣ふた。

外來漢は何か口の中でもごもご言つて長い髭を握りながら考へてゐた。やがて思ひついたやうに突然と「私の報酬を申さう 各方よ、こんな大事業に對しては小ッボケな報酬じゃ、外でもない私の女房にフライアを貰ひませうそれにあの二ツの燦

然たる寶玉の日と月を貰ふとしませう』と言つた。

この要求を聞いて神々は眉を擧げた神々はフライアを寶として寵愛してゐたからである。彼女は未曾有の美姫で天の光であつた生命であつた彼女がアスガードを去つた曉は歡喜の去つた時である。又日や月はイーサー族の子孫即ち下なる小さな世界に住んでゐる人間の光であり生命であつたが、機智に長けたローキが囁いて此方は此方であるの大工に出来ない難題を吹きかけてそれを條件に持ち出せば何事もあるまいと言つた、で熟議の上ローキが總代に談判することとなつた。

「偉人よ、吾々は一ツの條件に御身の要求する報酬を呈したのである。御身が工事に要する歳月は餘りに長い、城のために三年半は待ち遠しい、急いでゐる者には三百年も待つと同様の心地がする、で一冬の内に入手を借らずに城を仕上げて貰はう、すれば美姫フライアと日と月と御身に差出すこととしよう。が萬一夏の第一日にもなつて胸壁の石一個でも缺けてゐるか又は誰か入手を借りたとあれば褒美は差

(希臘神話)

出せない御身は無報酬で此所を立ち去らんけりやならない』とローキが言つた。

(希臘神話)

ローキは神々の名で斯く談じたが、その思案は自分の一丁簡に出たものであつた。初めの程は外來漢も頭を振つてそんな短い間に人手も借らずこの大事業が出来るものではない』と言つて顔を擧げてゐたがやがて『では拙者の馬一頭だけを相手に遣つて見ませう、良馬のスワデルフラーリを手許に連れて来て日短な一冬の内に入事を了へませう、若し了へなかつたら報酬は貰ひません、まさか四足の助手から聊かの力を借る位は否とおつしやるまい』と迫つた。

イーサー族は再び相談した。中で賢いものは外來漢の怪しげな申出を承諾するのは良策であるか否やを疑つた、がローキは再び承諾のこゝを迫つて『なに差支はありません、老耄れ馬の一頭位ゐたどて何ほどのことがあらう約束の期限内に城の出來ツこはない、吾々は勞せずに入城を得るのだしかも知れぬ報酬で』と言つた。

ローキが奈何にも熱心なので他にもこんな謀計を弄することを好まなかつたもの

もあつたが到頭ローキに同意して了つた。やがて勇士等の面前で外來漢とイーサー族とが互に契約を守らうとの正式の約束を固めた。

冬の第一日にこの奇怪な大工が仕事に着手した。彼が膂力は百人力を兼ねてゐるやうであつた。彼が愛馬のスワデルフラーリはこの偉大な大工の一倍等の仕事をした夜に入つては城を築くに入用な巨大の岩を曳いて來たこの地球の山ほど大きな岩であつた。晝の間はこの大工が例の鐵腕を振つてこれを積み上げた。イーサー族は彼れが働き振りを見て驚歎した。アスガアードの都にはこんな腕前のものはゐたことがなかつた。神々は顔見合せて不安の思をし初めた。この豪者はそも何物であらう彼が褒美を得た曉はさうあらう、フライアは宮殿の内で震へてゐた日や月は怖ぢて朦朧となつた。

仕事はすすん果取つた。城は日毎毎に段々高く積み上つて來た。冬の終までには唯三月しか残つてゐなかつたが建物は既に如何な巨人の攻撃を受けても安全な

(希臘神話)

(希臘神話)

ほどに高くて堅牢であつた。イーサー族は立派な新しい城が出来るのを悦ぶことは悦んだ。折角の得意もつまりは餘りに高い價を拂はんけりやなるまいとの恐怖のために挫かれた。仕残つた工事は門ばかりとなつたので次の三日間にそを仕上げやうものなら外來漢に否應なくフライアと日と月とを遣らなければならぬからである。

イーサー族はアイダ原に會議を開いた恐怖と憤慨とに満ちた會議を開いた。遂に自ら不覺を取つたことに氣が付いた。敵の巨人族の一ツと契約をしたのであつた。この大工が褒美を得た曉は天にも地にも悲みと歎が來るのだ『どうしてそんな途方もない契約を結ぶやうになつたのか、何者が吾々の最も愛撫するものを失ふこととなるやうな計らひをしたのか』とイーサー族の者等が互に尋ね合つた。この計らひをしたのも契約を履行することを言ひ張つたのもローキであつたことを思ひ出して皆彼れを責めた。

「ローキよ此度の災難の種を蒔いたは汝である。詭策を弄したのも汝である吾等の知つたことではない、今となつて尙策の施すべきあらば汝これを爲せ、汝もし吾等のためフライアと日と月とを救ふ途なしとせば汝は死すべし、これ余が命令なるぞ」と大父オーデンが言つた。他のイーサーも皆これに同じた。獨りソアのみは天外に悪魔狩に出てゐたので何事が起つたとも如何なる危険がアスガードの都に落ちかかつてゐるとも知らなかつた。ローキは大父の嚴命を聽いて酷く怖れて、「全く私の過失でありました。が彼が巨人であつたとは少しも存じませんでした彼は唯脅力の強い者とのみ思つてゐました。して馬の事でござるが……あれは別に異つた馬とも見なませんでした。が今になつて思ひますればあの馬さへるませんでしたなら工事は仕上りませんでしたのに。いや！ちよつと考が浮びました。大工めまだ門を仕上げてゐません、巨人に報酬を遣ふことはありません、私は奴めを誑かしてやりませう」と云つた。

(希臘神話)

さて冬の最終の夜となつた。門の頂上に今少し石を積み上げるまでとなつた。巨人は褒美は手のものと信じて残の石を曳きに馬を連れて出かけたが獨笑を含んでゐた。イーサーにおのが身元を悟られたこともローキが自分を誑らかさうと企んでゐることも知らなかつたからである。まだ仕事にかからぬうちに林の中から奇麗な牝馬が駈け出して来てスワデルフラーリに嘶いてこの疲れた馬に仕事を止め縁の野に来て休暇をしてはと誘ふ様子であつた。

(希臘神話)

スワデルフラーリは同類の四足獣一頭だに見ることもなく冬中激しい労働をしてゐたので酷う淋しい思ふすれば石を曳くので疲れてもゐた。馬は鼻息あらくこの新しい友を慕ふて若草の生ひ茂つた牧場へ驅け寄せた。巨人は怒りの聲をあらげ馬の跡を追ふて懸命に走つた。獨り馬を見失ふばかりではない已が成功の機會を取り外すのを氣遣つたからである。狂氣のやうに追つたのでアスガードの都中に馬の驅ける蹄の音と巨人の大きな足音が鳴り響いた。先に驅つた牝馬はローキが偽装し

たものであつたのでスワデルフラーリを遠く離れた秘密の牧場へ連れ込んで了つたので巨人は夜を徹して喚きたてて叫びたてしても馬は影だに見せぬので、じだんだ踏んで焦れてゐた。

さて夜は明けても門はまだ仕上らなかつたが夜と冬が同時に終つた。巨人の工事期限は満ちたので報酬を得るの権利を失つた。イーサー族は門に群つて来て見ると門を仕上るにまだ三個の石が不足なので一同は手を拍つて笑ひ且勝鬨の聲を揚げた。

「下郎よ汝は仕損じた、半途げの工事に對して吾等は報酬を拂ふ譯には參らぬぞ、汝は仕損じた。疾くアスガアードを去れ、吾等は汝と汝の種族とに需むるものは皆見抜いて了つたぞや」と大父オーデンが嚴格に宣告した。

その折巨人はおのが身元の露見したのを悟つて狂氣のやうに憤慨した。山のやうに大きな持前の姿に復つておのが築いた城の傍に高く突つ立ちながら、さては計略

(希臘神話)

であつたよな」と叫んだ「悪い計略だ、御身等ほどの途この償をせずばなるまい

恩知らずの者共よ余が御身等のために築いた城は如何な巨人の力にも及ばぬ堅牢な城でござる今更余が力にも毀てない、が御身等の華麗な都の殘部は毀つて見せやう

わい」と呼ばはつた。彼は燃ゆるが如き怒に任せてその通り遣つたであらう、がこの瞬時にハイムダルが黄金の喇叭を吹いて地球の端からソアアを呼び立てたので山羊の曳いてる車を走らし急いで救に遣つて來た。ソアアは巨人の傍近く地に跳び降りたと思ふとあの大きな奴がまだ何事の起つたとも氣付かぬ間に早やその首が大父オーデンの脚下に轉がつてゐた。ソアアが一撃の下に巨人の兇惡の根を絶ちアスガ

アトドを救つたのである。「これ汝が當然得べき報酬なるぞ！。フライアも日も月も汝がものではない汝に遣るものは死ばかりなるぞイーサー族の敵とあらんほどのものに惜まず遣るものは死ばかりなるぞや」とソアアが叫んだ。

(希臘神話)

こんな非常な手段でアスガードの都が無難になりしかも誰れにも否これを築いた巨人にすら毀てぬほど不思議に堅牢な一城が加つて、彌完備した、が門の頂上にはその儘三個の大石が缺けてゐて誰れあつてそを補ひ据えるほどの腕前のものがなかつた。これは當時イーサー族が人臣族を永久の敵としてゐたといふ記念物となつた。してローキの計略はイーサー族のためには美姫フライアを助け世界のためには日と月とを救つたもののローキが生きたがらへて得意の詭計を弄せる間はアスガードに苦勞の種は盡きなんだ。

◎雷神の槌の詮索

或る朝雷神のソーアが欠伸しながら目を醒して節瘤だつた腕を伸ばしながらいつも雲の枕の下に入れて大切にしていゐる槌を手探りに捜した。が宮殿中が震へたほど

(番 神 話)

(番 神 話)

怒號りたてながら起ちあがつた。槌が見えなくなつたのであつた。

さあ一大事だ。ソーアはアスガードの都の守護者で魔の槌ミールニアは彼が屈竟の武器で神族の敵共が敢て近づき得なかつたほど恐れてゐたものであつたからである。が若し敵兵がこのミールニアが紛失つたと聞いたたらどんな危険が天の宮殿を威嚇さないと限らなかつた。

ソーアは爛々たる眼光を放つて雲郷の隅々まで槌の行方を捜した。金髪的美丽妻のシツフにも二人の愛らしい娘のスリユードとローラにも手傳はせて捜した。共々手を盡して捜しに探したが見つからなかつた。大方誰れか盗んだのであらう。ソーアの黄色い髻が怒りの餘りに顛へた。髪の毛は直立してその尖が星の光のやうに輝つた。一族のものは皆恐れて震へあがつた。

「又ローキ奴だ！。こんな悪戯の影にはローキ奴があるに相違ない」とソーアが叫んだ。ソーアが侏儒のブロックのためにローキを捕へて引渡し日頃高慢を叩く彼が

唇を縫詰めさせたことであつた以來ローキは彼を怨んでるのを知つてゐるからである。

が今度はソーアが考へ違ひであつた。槌を盗んだのはローキではなかつたそれを盗むには餘りに臆病であつた。いづれはソーアに怨を報いやうとは思つたが安全な時機の來るのを待つてゐた。ソーアが自分から躓つて危地に落ちた折に一言か二語も遺恨を洩しさへすればよいのであつた。

この際ローキはどこまでも親切らしくしてゐやうと思つた。それでソーアが「この盗人めおれの槌をどうしたか」と怒鳴り込んで來た折にローキは驚きはしたが腹も立てねば粗暴な返事もしなかつた「御身は大事の槌を紛失したと申されるかソーアさん、それはお氣の毒でござる。巨人族が聞いたならアスガードに押し寄せて來やうかも知れませんが」と含み聲で言つた。ブロックに縫はれた唇がまだ痛んだからである。

(新編神話)

「シイツー。おれの悪念するのもそれだ。だが待つてローキ、おれは今度の悪戯について汝が手を疑ふのだ。さあ白状せい」

その折ローキは夢にもそんな悪い事はしないと云ひ張つた「が私にはその盗人の見當が大抵ついてます、ソーアさん何も御身のためにお手傳い申して見つけませう」と氣休めを言つた。

フウムー。大層親切だな、だが御身は神族中での頓智者であれば巨人族を敵手にする折から吾が味方に欲しいのだ。下雷神の槌を盗んだものを探つて呉れまい」といつた。

ローキは近寄つてソーアの耳に囁いた「そら、下の世界ではあの通りの雷雨で嵐が吹き荒んでゐるではありませんか。誰れかが貴公の雷槌をやたらに弄んでます、盗人の見當はつきませんが、貴公の敵となつたスリムより外にはないでせう。彼は貴公を氣取つて雷槌の柄が握つてみたうて指がむづ／＼してゐるんです。して貴

(新編神話)

公に換へて自分が雷公と世間から言はれてみたいんです。まあご覧なさい、あの通りの雷雨です。早く槌を取り戻さんけりや世界はばらくに毀れて了ひますぞ」

ソーアは酷く立腹して『あの不埒なスリムめを捜し出してひねり潰してやつたら神族の武器に手をつけた罰が分るだらう』と怒駭つた『まあまあ静に、彼は伶俐な巨人で侮れない奴です、なんば貴公だからといつても楓の若葉のやうな小兒の手からでんでん太鼓をもぎ取る様な譯にあの槌は取り戻せませぬ、否これは計略を使ふ外はないでせう。ソーアさんならその計略をお授け申してもよいですが』とローキがいやに笑ひながら言つた。

ソーアは勇剛で質朴な者であつたのでローキの偽計や奸策を弄するのが氣に入らなかつた。彼は武人氣質であつた。突撃や武器の閃きなどが好きであつた。が雷槌がなうては巨人と格闘することが出来なかつた。でローキの忠告を成程と思つてこの事件を彼に任せやうと決心した。

(希臘神話)

ローキはおのが機智を弄するやうな面倒が起つて他人を危地に陥れることが好きなので今は夢中になつて『さあさあ、フライア姫の許に行つて鷹羽根の衣裳を借りるんです。が姫はどうも私の言ふことに耳を借しませかんなら貴公にお頼み申さう』といつた。

(希臘神話)

それで先づ二人してアスガアードの都中で第一の美姫フライアが住んでゐるフラクワンの宮殿を訪ふた。姫は美中の美艶中の艶で華のやうな目から出る涙は朝な夕な地球の百花を嬉ばせた。姫からソーアが鷹の羽根の衣裳を借りた。この衣裳を姫が日頃その身に装ふて大きな美しい鳥のやうに世界中を翔け廻つたものである。ソーアがこの衣裳の助けで雷槌を取り戻すのだと云つたら姫は悦んで借す氣になつた。雷槌が見つかるまでは姫の身にもその他あらゆる神族にも危険が落ちかかるんだと思つてゐたからである。

『さあ貴公のため槌を取つてあげませう』とローキがいつて鷹の衣裳をつけ藍色の

翼を張つて世界を上へ上へと狩撃つたり大洋を渡つて下へ下へと翔つたりした。今度には春も来ず日光も見えずにいつも物凄く冬で山々は氷の塊のやうに積み累り大きな洞が開の中に横じさうに口を開いてる暗い國に來た。こはジヨタンハイムといつて霜の巨人國であつた。

さあローキがここまで來て見ると巨人王のスリムが犬や馬と遊びながら吾が宮殿とせる洞の外に出てゐた。犬は象のやうに馬は家ほほに大きくスリムの體は山ほど大きくあつたのでローキは慄へながらも勉めて剛さうに見せかけてゐた。

「やあ、ローキさん、アスガアードにゐる御身の小さな一族は無事ですか羽根をつけた方よ、して御身はそんな扮装でよくまあ一人で巨人國へ遣つて來たものなあ」と恐ろしい聲でスリムがいつた。この聲はソーアの聲ほど大きいといつて自慢の聲であつた。

「アスガアードでは不快な日を送り人間の世界では雷雨で困てゐるのでござる。今

(茶屋神話)

(茶屋神話)

通りかかつた折にも地球には風が吹き荒れ雷雨の烈しいのが聞えてござる。誰れか剛勇なものが吾がソーアの槌を盗み申した。そは御身ではござらぬかスリムさん、巨人中での偉人——ソーアにも増して偉大なる御身ではござらぬか」

ローキは何んでも面白いと思はれるのを好む者の弱點を見抜いてゐたのでスリムに縋び附ふためにさういつたのであつた。

その時スリムは意氣揚々として氣高いソーアの威嚴を装ふたが却つて醜い脹れた怪物に見えたばかりであつた。

「さやうさやう。ソーアの持つてゐた槌はおれの手許にあるがそれで音長たる面目がどうあらうかのう」とスリムがいつた。

「哀しいことには吾がソーアもこの武器がなうては奈何にも弱いものでござるが、スリム殿貴公のご威勢ではこんな槌一ツあつても無くてもどうありませう斯んなものに便る貴公ではござらぬまい。その槌どうかこのローキに渡して下されう。ソーア

が玩具一ツのためいらまをアスガードを騒がすてもとらぬからいせし」王女
キが歎息しながらいつた。

だがスリムはさう容易くは追従に乗せられて盗んだ寶を手離さなかつた。彼はさ
ながら洞穴の口に石垣を築いたとでもいはんばかり滅法幅の廣い齒を露はしながら
「雷槌のミオールニアは乃公の物だ。乃公は剛中の剛なる雷公だ。おれは槌をソ
アに見つかからない海の洞の下十二三里もあつて女王ランが王女の白い冠を被つて
るウエーブズ(波)姫と住んでゐる邊に隠して置いたのだが、ローキさん乃公の云ふ
ことをよく聞いて置いて歸つたら神族にいつて呉れ乃公は一ツの條件をつけて槌を
返してやると云つてゐた」とあの美しいフライア姫を乃公の妻に呉れたなら返し
やると云つてゐたと云ふて呉れ」といつた。

「あの美しいフライア姫」と聞いて思はず失笑さうとして笑を殺した。こんな醜い
奴に神族の花とあるものがどうしてまゝ渡されやうと心の中には思つたが「あ、あ

(番 讀 神 話)

(番 讀 神 話)

成程、貴公は槌と交替にアライア姫が所望とな、交換の價は随分とお高うござるな
スリム君。が拙者は貴公のため悪しくは計らひ申さぬ。拙者の計らひ通りに參つた
ら近い内に世界隨一の美しい花娘が貴公の室闈を叩いでござらう。さよなら」と唯
丁寧に云つた。

それでローキは鷹の羽根を着けてシウ〜と空気を切つてアスガードの都へと
急いだ。行く行くスリムとの問答の有様を告げやうものならアスガードに一騒ぎ
起らうと思つて心の中に笑つた。先づソアを怒らせやうとスリムが押柄な様子を
漏らさず復命した。次にフライア姫の許に行つて姫を身震ひして怖れさせんものと
スリムの醜い狀を有体に話し先方の所望の次第をも告げた。

「神族がローキの話をして怖れられた狀は想ひ遣られるのである。乃公の槌を
あの悪漢め乃公の槌を盗んだと曰狀した上に自分が雷公だなど高言するとや。
不將至極」と怒つた。

「何といふ醜い巨人であらう。あんな恐ろしい老怪物の花嫁となつて一生涯の物凄く山腹の牢屋に棲めどな。聞くだに身震ひするわ」とフライア姫が泣き喚いた。

「さあ婚禮服をお着けなさいフライア姫よ。してご一緒にジョタンハイムへ参りませう。頭の廻りにはあの評判の星のやうに輝つた頸飾をお掛けなさい。八日のうちに婚禮があつてソーアの槌が戻るんですから」と邪見にもローキが云つた。

其折フライアは泣沈んだ。「何して行けませうと行ません！喜の此家——大父オーデンのこの卓子を離れて怖ろじのあの國へは行きません。ソーアの槌は大切ですが親切な神族がこのフライアに對する愛はもつと大切ですわ、親切なオーデンも親愛なる兄のフレも私に同情して下さいな。私を遣つて下さるな」と喚いた。

「妹を遣るものか」とフライアを抱いてフレが叫んだ。

「否、姫を遣ふことは相成らぬ」と聲を揃へて神族が呼ばはつた。

「が乃公の礎——あのミオールニアは取戻さなけりやならん」とソーアが云ひ張つ

(巻四 神話)

た。

「してスリムに對する約束は履まなけりやならんわい」とローキが云つた。

「汝が約束は寛大に過ぎた。汝が約束は安價で結んだのだから高價の寶玉ではない

此方で守らないでも宜いと大父オーデンが嚴かに云つた。

次にアスガードに架つてゐる虹の橋の入口を守つてゐる不寝の番のハイムダルが意見を述べた。ハイムダルは神族中の智者で未來を見通し事を未然に知るの明があつた。彼が齒は皆黄金でその黄金の齒を透して速ぶるには「私に一ツの計略がある。ソーアをフライア姫に扮装させて婚禮服を着けた花嫁にしてジョタンハイムに遣つてスリムと談じた上にて槌を取戻させるんでござる」と云つた。

がこれを聞いたソーアは酷く立腹して「何だと、乃公を娘に扮装させるとや、怪しからんことを云ふ。彼奴め乃公を嘲つて娘だなんとぬかし居る。巨人族はいふまでもなくあの侏儒族すらいつまでも乃公を嘲弄するに極つてゐる。乃公は行くもん

(巻四 神話)

か、乃公は聞ふんならごまでも聞ふ。死ぬんなら死ぬ。が婦人に扮装つて行くな
んで金輪際しないわい』と怒號つた。

が、ローキは素より企圖んだことであつたので語氣を鋭くして答へた『何んと、
ソニア、汝はそんな氣で汝が槌をも失いアスガードをも危地に陥れるのか考へて見
る。汝が行かないけりやスリムは巨人族の大軍を率ひてアスガードを襲ひ吾等を
都より逐ひ退けるに違ひない。その時こそスリムは否應なくフライア姫をおのが花
嫁とするばかりか、彼が槌の威力で汝をも彼が奴隸とするに極つてゐる。どうだ汝は
斯んな圖取が好いたのか。否。ハイムダルの計略は面白いおれは加勢しても實行し
て見せやう』

ソニアはまだ躊躇つてゐた。がフライア姫が來て白い手を彼が腕の上に据えてそ
の翠んだ顔を見あげて宥めながら『私を救ふんだと思つてね。ソニアさん』と頼ん
だ。してソニアは行かうと云つた。

(番 劇 終)

(番 劇 終)

そこで神族がソニアを美女に扮装たすといふて大騒ぎをして慰んだ。ブランハイ
ルドの姉妹等やオーデンの九人娘のワルキリー等がその扮装に手を貸した。ソニア
の黄色い髪にブラシをかけたたり縮らしたり絹や真珠の頭飾をつけたりしては皆が
失笑した。寄つてたかつて衣服の紵糸を抜いたり縁を下ろしたり大きくするため
足し切れを入れたりしてどうやらこうやら大きな脚や節瘤だらけの腕をフライア姫
の猩々緋の衣裳で隠した。がその下には鎖子鎧だの力帯だのを着込んだ。フライア
姫は手づからあの評判の星のやうに輝つた寶玉の頸飾を彼が頸の廻りに巻き附けて
やつた。姫の母のフリッグ女王も鏘然と音のする一把の鍵を彼が帯にさげて遣つた
この鍵は婚禮の折に花嫁の腰に着けるのが慣例であつたからである。最終に乙女に
不似合なソニアの烈しい眼つきと黄色い髪の見えないやうに長い銀色の被衣を投げ
かけた。かくて巨人ですら見たがるやうな立派な身長の高い花嫁が出来上つた。が
手には鐵製の手套をはめてゐたして一同は唯一事のため——盗まれた槌の柄を握ら

んために頭を悩ました。

まあ何んと愛らしい乙女だらう。してこのファイア姫が来るのを見たら無スリムが悦ぶことだらう！。花嫁のソーアさん私は貴方の腰元となつて随いて行きますぜう』先の嬉しい様子が見届けたのですからとローキが笑ひながら云つた。

「そんなら来い、汝が行くのが當然だ乃公は斯んな假面を被るのは好かない。汝が行かないならこの假装は乃公の臂で突き殺して了ふから」と佛頂面して云つた。

かくてソーアが婚禮の盛装をして腰元のローキを脇に随へアスガードを出た折には雲の上に高笑ひの聲が響いた。ソーキは鞭を振りあげ金蹄の雙生山羊を急がせた。神族が見物に出揃つてゐる虹の橋から反響する囃し聲を避けやうとしたからである。ローキは娘のやうにしとやかに手を折り重ねて坐しながらソーアの怒つた顔つきを打ち眺めて笑を洩した。が何も云はなかつた。そはミオルニアの槌はランの王国の海底十二三里も下に隠れてゐるの下さへ今ここでソーアと餘りに滑稽を云ふ

(希臘神話)

のは好くないと思つたからである。

(希臘神話)

それで二人はシヨタンハイムに逸散に走つたシヨタンハイムではスリムが美しい花嫁の来るのを待ち侘びてゐた。ソーアの山羊は海や陸や遙か下にある人々の上を雷鳴のうちに通つた。人々はその音が頭の上で轉がる様に聞えるので驚きながら仰むいて「酷い雷鳴だなあ！。今夜はソーアが長旅をしてゐると見える」と云つた。スリムは今か今かと耳を傾けてゐたので二人の近づいて来る音を忽ち聞きつけて「ホーラ。誰れかアスガードから遣つて来たぞ——オーデンの小供のうち唯一人が来るのにしては恐ろしい轟聲だ。そら者ども乃公の妻となるフライア姫を連れて来たかよく見届ける」と呼ばはつた。

やがて見張りの巨人が山の頂から下りて来て一臺の四輪車が二人の乙女を玄關へ連れて来たと云つた。

「走れ者ども走れ！。乃公の花嫁が来居るぞ、大宴會の用意に長椅子へ絹の坐蒲團

を並べろ、廣い宇宙で第一の美女のため室内を美しく裝飾するんだぞ。金角の牝牛や漆黒の牡牛を皆引き出せ乃公の富を彼女に見せるのだ。彼女の愛らしい眼の眩むほどに乃公の黄金や寶玉を皆積み重ねろ。彼女は乃公を富の王と思ふだらう。して乃公が美の女王たる彼女を手に入れた上は乃公に不足な寶は一ツもないのだ」と熱に浮かされたスリムが叫んだ。

四輪車が門に停つて背の高い花嫁の頭から足まで被衣を着たのと腰元の頭まで覆面したのとが車から出た「何とまあ風邪の用心をしたものでせう」と花嫁を一目なり見やうと寄つて来て肩越しに覗いてゐた巨人の貴婦人等が囁いた。

スリム王は二人の乙女を護衛するために六人の立派な家來を遣つた。この家來達は金角王といつて家來中の長老として王に仕へたものであつた。見るも目映ゆき黄色い地金の總の附いた金衣を着けた黄金王もゐた。銀の飾金物の附いた衣裳を派手やかに装ふた白銀王もゐた。黒い鐵王と青い鉛王と肩を並べて腰を屈めてゐた。

(番 廣 神 話)

その背後に赤くて勇ましげに輝つに銅王と殆んど銀のやうに見えた派手やかな飾縁をつけて容體振つて歩んでゐた錫王とが見えた。してこの麗はしい陪從王の一隊が丁寧にソニアとローキとを王宮に案内し接待に手を盡した。二人の乙女の身分については少しも疑念を抱かなかつたからである。

さて夕方になつて婚禮の祝に盛んな酒宴が開かれた。スリム王は紫と金色の盛装を凝して黄金の椅子に凭りかかつてゐる状がいつもより却つて醜くかつた。王の脇には花嫁がゐたがその顔をまだ誰れも一目たりとも見たものがなかつた。その片脇には腰元のローキが居た傍にゐてソニアの失策でもしたときに取繕はうと思つたからである。

さて饗應の皿は巨人族の食膳に似つかはしい大袈裟なものであつた。牛肉は船の甲板ほどもある大皿に丸焼きのまま載つてゐた。李のブレンデには蹴鞠ほど大きな李が入つてゐて羽毛の衾のやうにふつくりしてゐた。婚禮菓子は雪を載いた乾草の

堆のやうであつた。巨人等は道に大食した。が上品な乙女と思はれてゐるソーアの献立は小さな黄金の皿に少しづつ盛つてあつた。さてソーアは長旅をして来て酷く腹が減つてゐたので被衣越しにローキに囁いて「乃公は餓死するよローキ、斯んな飯事みたやうなものを宛行はれた分には堪つたものでない。乃公は自家にゐるとききのやうに食ふ丈は食はんけりやならん」といつた。で直と手盛で思ふ存分に遣つた。あんな上品な花嫁がよくまあ食へも食へたものと巨人は嘸呆れたことであらう。

ソーアは先づ牛の丸焼をポツポツと平らげて了つて次に生鮭八尾を八口に遣つたそれから四邊を見廻し婦人客のため食卓の片隅に据わてあつた菓子と砂糖漬の大皿に手を出してこの花嫁が皆食べて了つた。その席に列つてゐた少女等はお菓子のなくなつて了ふのを見て互に顔見合ながら「まあ、今度の奥様が毎日毎日こんなに召し食つたなら私達の載くものはなくなつて了ふわ」と囁いた。おまけにソーアは

(新編神話)

酷く喉が渴いてゐたので一杯又一杯と引つ切りなしに盃を擧げてゐる間に三樽の酒を飲み干して了つた。ソーアの飲食の量には巨人も誰あつて敵するものがなかつたので有繋にスリムも驚いて「あんなに食ふ花嫁は見たことがない。して又あんなに呑むのも尙更らないわい」といつた。

が腰元のローキが靜にスリムに囁いて「大王よ姫は餓えて死なれる程でありました。甚うジョタンハイムにご執心なので八日の間といふものは何も召しあがらんでした」といつた。

それを聞いたスリムは甚う悦んで花嫁の大食したのを見容して一心に彼女を愛した。彼は花嫁の覆面の片隅をあげて接吻しやうとして凭れかかつた。がその手を俄に下して怖れて起ちあがつた。婚禮の覆面を透して輝つてゐたソーアの怒つた眼の閃めきに打たれたからである。

何故ファイアの眼つきがあんなに鋭いんだらう。電のやうに閃めき火のやうに燃

(新編神話)

ゆるわい」とスリムが叫んだ。

が又機敏な腰元が「いえスリム殿驚き召るなお可愛さうに奥様の眼は不眠のため
に赤いのです戀にお焦れなすつて輝るのですわ。フライア姫はシヨタシハイムに甚
うと執心なので九夜の間といふもの一睡も遊ばさんのですものを」と囁いた。

その折又スリムは前にも増して悦び一刻も早くフライアをおのが愛しの妻と呼び
たう思つて侍者を呼び立て「あの結納物をこれへ出せ。ソーアの榎ミオルニアを持
つて来て約束通りフライア姫へ渡すのだ。乃公が約束を履んだ上は姫は乃公のもの
だ——一切乃公のものだぞ」と呼ばはつた。

婦人服を着けてるソーアは心の中で笑つた。して鋭い眼で凝と廣間を見廻はし、
天鵝絨の褥の上に恭しく榎を載せて持つて来る侍者を迎へた。ソーアは日頃手馴
れた榎の太い柄を握らんものと手の指をムツ／＼させてゐた。が醜い老耄れたスリ
ムの脇の椅子に靜に坐して両の手をしとやかに折り重ね羞を含んだ花嫁のやうに頭

(希 羅 神 話)

を垂れてゐた。

侍者は榎の重みに堪え兼ねて頬を脹らし喘ぎ喘ぎ段々と近寄つた。侍者は餘りに
重いので乙女の手取ることも膝の上に置くことも出来まいと思つたのでソーアの
脚下に据えやうとした折しも俄にソーアの胸が躍つて奮然と激怒の叫びと勝鬨の聲
を揚げたと思ふ間に鐵のやうな指で一攫みに榎を握り一方の腕で恐ろしげな顔を
隠してゐた。被衣を引き裂いて脚の下に踏み付けやがてその脇の椅子に屈んで驚き
怖れてゐたスリム王の方へ向いた。

「盗人め！。フライアが結納として汝に遣るのは此れだ！」と怒號つて王の頭の邊
に榎を旋轉して一度！。二度！。三度擲つた。電のやうな第一撃でスリムは死んで
椅子から轉がり落ちた。第二撃で巨人の一族擧つて打ち殺された。第三撃で宮殿が
崩れてさながら玩具の家みたやうに倒れた。

ローキとソーアは無事に崩れ跡に立つてゐたが引き裂けた女の衣裳を着てゐるの

(希 羅 神 話)

で何とも可笑しな光景であつた。して、ローキも今は悪戯者の地金を露はし吹き出して笑つた。

「やあソーアどうだ分つたか乃公の計略が……」と云ひかけた。がソーアは槌を上げて徐に打ち振りながら「やあローキ面白い道化だつた乃公のいやがつかつた貴公の計略中々うまく行つたぞ。兎も角乃公の槌は手に入つた道化もこれで仕舞ひだ。もう貴公からも誰からも笑はれる氣遣ひなした。いや今度の假装劇の事はもう云ひッこなしだぞ。いいかね」。

ローキは憎さげに聞いてゐたがやつとのことで嘲笑を咬み殺して了つた今は槌といふ武器を持つてるソーアを笑ふのは身のためでないと言つたからである。

その後もアスガアードの都でソーアが娘に扮装スリム王から結納を取つた折の噂が出たことは一度や二度ではなかつた。がミオルニアは兎も角無事にアスガアードに戻つた。

(希臘神話)

傳
希臘神話終

(希臘神話)

大學生館發兌小說類書目

三宅青軒君著

英雄 菊水正吉

價廿五錢 郵稅四錢

英雄 菊水正吉後篇

價廿五錢 郵稅四錢

東京二六新聞掲載 三宅青軒君著

豪傑 我儘太郎

價廿五錢 郵稅四錢

豪傑 續我儘太郎

價廿五錢 郵稅四錢

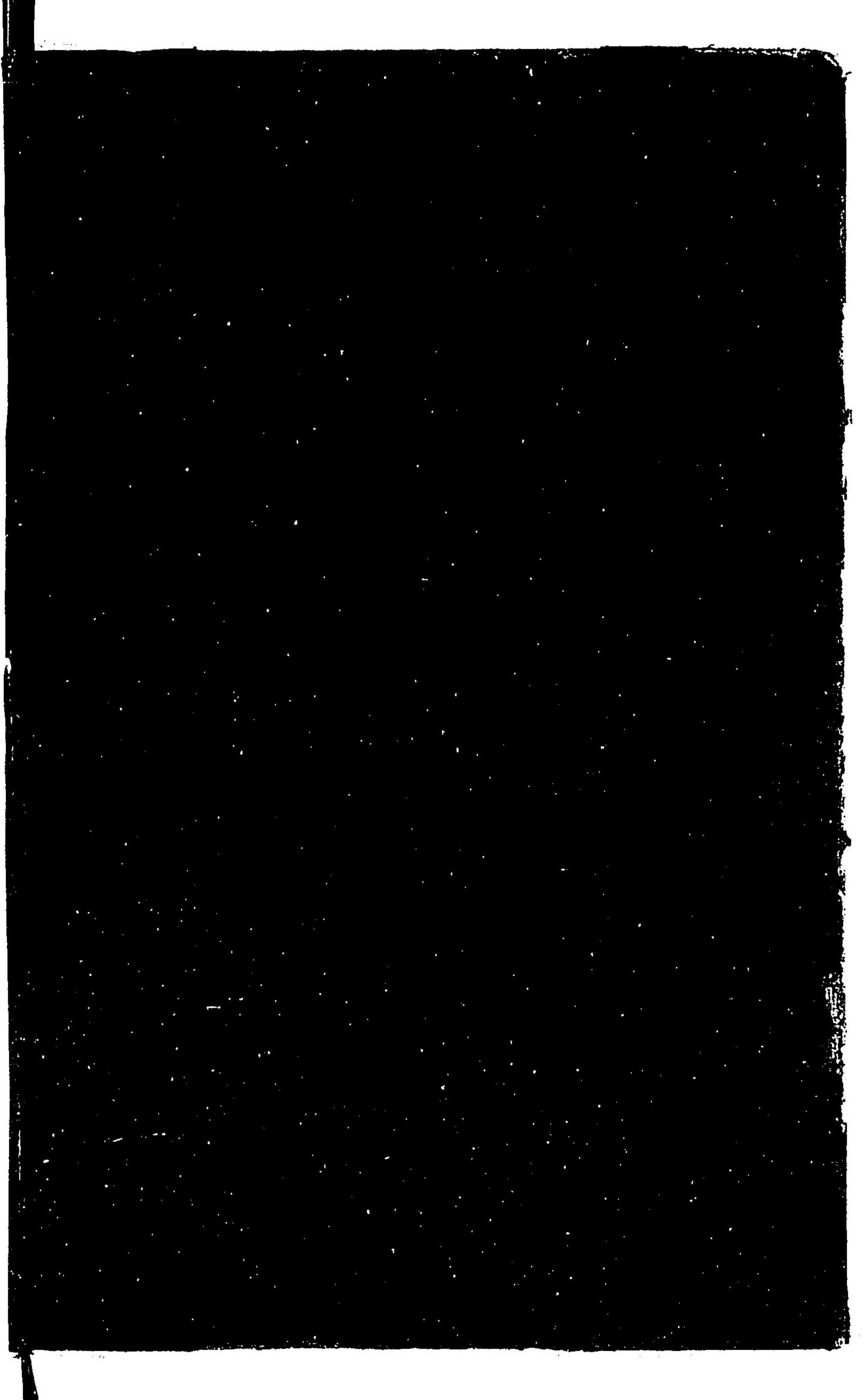
東京二六新聞掲載 三宅青軒君著

明治 今様水滸傳

價參拾錢 郵稅四錢

阿部川原の獄門場に由井正雪の娘と團々す選
 通るは壯麗な武術を授け、心服せしめ、其師力
 なりては、法を授け、三兄弟の風を結ぶ。こ
 れは、大場を設けて、天下一の無敵の名を轟
 かし、その依りて、大納言志を協せ、一犬計を
 試み、その依りて、大納言志を協せ、一犬計を
 後編に依りて、大納言志を協せ、一犬計を
 變不思議の機略を掲ぐ。壯快無比の活躍と前編を
 豊太閤を猿面にして、天下のみな太閤の系譜
 朝鮮に威を震はしめ、酒を仰いで、神自若たる
 なり、秀吉の影を知らず、太閤記に載せら
 び、怪物に異ひ、千の心なれば、知らず、太閤記に載せら
 胸中を照し、記したる明鏡なり。知らず、太閤記に載せら
 第一に、何處の珍説なり。鏡なり。知らず、太閤記に載せら
 明治の行つた男の持て、今川慶三郎の異名を
 取つた忠助、柔術の達人、今川慶三郎の異名を
 も、頼むは、常世無双の味方、天晴無双の来降なり
 彩を放つて、敵玉も愛しむ、無双の来降なり
 月村の身か、疑はる、愛しむ、無双の来降なり
 音の化身か、疑はる、愛しむ、無双の来降なり
 此の頃の志士、俠客の目、愛しむ、無双の来降なり
 垣の柱を挫いて、四民の安堵を得せしむ。

338
25



338
25

M

013574-000-9

338-25

希臘神話（伝説）

荒井 霞外／著

M44

ABA-0041

